問題 0001　（難易度 1）

個別原価計算が適用される生産形態として、最も適切なものはどれか。
ア：種類の異なる製品を注文や仕様ごとに個別的に生産する形態
イ：同一製品を大量に連続生産する形態だけ
ウ：商品の仕入販売だけを行い製造しない形態
エ：製品別原価を一切把握しない形態

答え・解説　　正答：ア

ア：個別原価計算は、種類を異にする製品を個別的に生産する形態に適用される。
イ：同一製品の反復連続生産には総合原価計算が適する。
ウ：個別原価計算は製造原価計算の方法である。
エ：製造指図書ごとに原価を集計する。
総合解説：個別原価計算では、製造指図書ごとに直接費と間接費を集計し、個別製品・ロットの製造原価を算定する。

問題 0002　（難易度 1）

個別原価計算における製造指図書の役割として、最も適切なものはどれか。
ア：会社全体の売上高だけを記録する。
イ：特定の製品・注文の製造を指示するとともに、その指図書番号を原価集計単位として用いる。
ウ：株主ごとの出資額を記録する。
エ：材料の期末時価だけを記録する。

答え・解説　　正答：イ

ア：製造指図書は製造・原価集計に用いる。
イ：個別原価計算では製造指図書が製品別原価の集計単位となる。
ウ：株主名簿等の役割である。
エ：製造指図書の目的ではない。
総合解説：製造指図書は製造作業の指示と、個別製品原価の集計単位という二つの役割を持つ。

問題 0003　（難易度 1）

個別原価計算の原価計算表に通常集計されるものとして、最も適切なものはどれか。
ア：得意先別の売掛金残高だけ
イ：株式発行による資本金増加だけ
ウ：製造指図書別の直接材料費、直接労務費、直接経費、配賦された製造間接費など
エ：法人税等の税率だけ

答え・解説　正答：ウ

ア：売掛金元帳の役割。
イ：原価計算表とは無関係。
ウ：原価計算表は指図書別に製造原価を集計する。
エ：個別製造原価の集計資料ではない。
総合解説：原価計算表では、製造指図書ごとに直接費と製造間接費を集計して製造原価を算定する。

問題 0004　（難易度 1）

製造指図書No.101に主要材料120kgを直接消費した。材料消費単価は1kg当たり800円である。No.101へ賦課する直接材料費はいくらか。
ア：120,800円（数量と単価を加算する計算）
イ：800円（単価だけで消費量を反映しない計算）
ウ：120円（数量だけで金額になっていない）
エ：96,000円（120kg×800円＝96,000円）

答え・解説　正答：エ

ア：数量と単価を加算している。
イ：単価だけで消費量を反映していない。
ウ：数量だけで金額になっていない。
エ：120kg×800円＝96,000円。
総合解説：個別原価計算の直接材料費は、当該指図書に関する実際消費量に消費価格を乗じて計算する。

問題 0005　（難易度 2）

製造指図書No.205の直接作業時間が45時間、適用賃率が1時間2,000円である。No.205へ賦課する直接労務費はいくらか。
ア：90,000円（45時間×2,000円＝90,000円）
イ：47,000円（時間と賃率を加算する計算）
ウ：2,000円（賃率だけを用いる計算）
エ：45,000円（1時間1,000円として別の基準で計算した値）

答え・解説　　正答：ア

ア：45時間×2,000円＝90,000円。
イ：時間と賃率を加算している。
ウ：賃率だけ。
エ：1時間1,000円として誤計算している。
総合解説：直接労務費は当該指図書に関する実際作業時間等に賃率を乗じて計算する。

問題 0006　（難易度 2）

製造間接費の予定配賦率が直接作業1時間当たり1,500円で、製造指図書No.310の直接作業時間は80時間である。No.310への製造間接費配賦額はいくらか。
ア：81,500円（時間と配賦率を加算する計算）
イ：120,000円（80時間×1,500円＝120,000円）
ウ：1,500円（配賦率だけを用いる計算）
エ：80,000円（1時間1,000円として計算した値）

答え・解説　　正答：イ

ア：時間と配賦率を加算している。
イ：80時間×1,500円＝120,000円。
ウ：配賦率のみ。
エ：1時間1,000円で誤計算している。
総合解説：個別原価計算の間接費は原則として予定配賦率を用い、各指図書の実際配賦基準数値に乗じて配賦する。

問題 0007　（難易度 2）

製造指図書No.401について、直接材料費180,000円、直接労務費120,000円、直接経費30,000円、製造間接費配賦額90,000円である。No.401の製造原価はいくらか。
ア：330,000円（製造間接費90,000円を含めない計算）
イ：390,000円（直接経費30,000円を含めない計算）
ウ：420,000円（180,000＋120,000＋30,000＋90,000＝420,000円）
エ：300,000円（直接材料費と直接労務費だけを合計している）

答え・解説　　正答：ウ

ア：製造間接費90,000円を含めていない。
イ：直接経費30,000円を含めていない。
ウ：180,000＋120,000＋30,000＋90,000＝420,000円。
エ：直接材料費と直接労務費だけを合計している。
総合解説：個別原価計算では、指図書別に直接費と配賦された製造間接費を合計して製造原価を求める。

問題 0008　（難易度 2）

製造指図書No.502の製造原価が600,000円で、同一仕様の製品150個がすべて完成した。1個当たり製造原価はいくらか。
ア：600,150円（原価と数量を加算する計算）
イ：90,000,000円（原価と数量を乗算している）
ウ：150円（数量だけを金額としている）
エ：4,000円（600,000÷150＝4,000円）

答え・解説　　正答：エ

ア：原価と数量を加算している。
イ：原価と数量を乗算している。
ウ：数量だけを金額としている。
エ：600,000÷150＝4,000円。
総合解説：一つの製造指図書で同一仕様品を複数個製造する場合、指図書原価を完成数量で除して単位原価を求める。

問題 0009　（難易度 2）

製造指図書No.610の製造が完了し、集計された製造原価750,000円を完成品へ振り替える。適切な仕訳はどれか。
ア：（借）製品750,000 ／（貸）仕掛品750,000
イ：（借）仕掛品750,000 ／（貸）製品750,000
ウ：（借）売上原価750,000 ／（貸）仕掛品750,000
エ：（借）現金750,000 ／（貸）製品750,000

答え・解説　　正答：ア

ア：完成した指図書原価を仕掛品から製品へ振り替える。
イ：完成時の振替方向が逆。
ウ：完成しただけで販売していない。
エ：完成時に現金取引はない。
総合解説：個別原価計算でも完成時には指図書に集計された製造原価を仕掛品から製品へ振り替える。

問題 0010　（難易度 2）

決算日に製造指図書No.701は未完成で、同指図書に直接材料費200,000円、直接労務費100,000円、製造間接費80,000円が集計されている。最も適切な処理はどれか。
ア：380,000円をすべて当期売上原価にする。
イ：合計380,000円を仕掛品として期末棚卸資産に含める。
ウ：200,000円だけを材料として残し、その他は費用化する。
エ：380,000円を資本金へ振り替える。

答え・解説　　正答：イ

ア：未完成なので販売済み原価ではない。
イ：未完成指図書に集計された製造原価は仕掛品原価。
ウ：未完成製品に投入済みの全製造原価を仕掛品に含める。
エ：資本取引ではない。
総合解説：期末時点で未完成の製造指図書に集計された原価は仕掛品として貸借対照表へ計上される。

問題 0011　（難易度 3）

期末時点で、No.801の累計原価は300,000円で完成済み、No.802は220,000円で未完成、No.803は180,000円で未完成である。売却はまだ行っていない。期末仕掛品はいくらか。
ア：700,000円（完成済み指図書も仕掛品に含めている）
イ：300,000円（完成済み指図書だけを仕掛品としている）
ウ：400,000円（未完成のNo.802とNo.803の合計220,000＋180,000＝400,00）
エ：220,000円（未完成No.803を含めない計算）

答え・解説　　正答：ウ

ア：完成済み指図書も仕掛品に含めている。
イ：完成済み指図書だけを仕掛品としている。
ウ：未完成のNo.802とNo.803の合計220,000＋180,000＝400,000円。完成済みNo.801は製品。
エ：未完成No.803を含めていない。
総合解説：個別原価計算では、期末に各指図書の完成・未完成状況を確認し、未完成指図書の原価だけを仕掛品とする。

問題 0012　（難易度 3）

当月末の原価計算表は次のとおりである。No.A：直接費300,000円・製造間接費100,000円・完成、No.B：直接費240,000円・製造間接費80,000円・未完成、No.C：直接費180,000円・製造間接費60,000円・完成。完成品へ振り替える原価合計と期末仕掛品の組合せはどれか。
ア：完成品振替960,000円、期末仕掛品0円（未完成Bまで完成品へ含めている）
イ：完成品振替400,000円、期末仕掛品560,000円（完成済みCを仕掛品側へ別分類している）
ウ：完成品振替720,000円、期末仕掛品240,000円（製造間接費の集計を別の基準で行う計算）
エ：完成品振替640,000円、期末仕掛品320,000円（A400,000円＋C240,000円＝640,000円）

答え・解説　　正答：エ

ア：未完成Bまで完成品へ含めている。
イ：完成済みCを仕掛品側へ誤分類している。
ウ：製造間接費の集計を誤っている。
エ：A400,000円＋C240,000円＝640,000円。B320,000円が仕掛品。
総合解説：原価計算表では、各指図書の直接費・間接費を合計し、完成済みは製品、未完成は仕掛品へ区分する。

問題 0013　（難易度 1）

個別原価計算における仕損費について、最も適切な説明はどれか。
ア：仕損品の補修や代品製作等により追加的に負担する製造原価などを所定の方法で算定したもの
イ：完成品を販売したときの売上高
ウ：材料購入時の正常な仕入代価そのもの
エ：株主への配当額

答え・解説　　正答：ア

ア：原価計算基準は補修・代品製作等の状況に応じ仕損費を算定する。
イ：仕損費は製造上の損失原価。
ウ：仕損に関する追加・失敗原価ではない。
エ：製造原価とは無関係。
総合解説：個別原価計算の仕損費は、補修可能か、代品製作が必要か、別個の指図書を発行するかにより計算方法が異なる。

問題 0014　（難易度 1）

仕損品は補修により回復可能で、補修指図書を発行した。補修指図書に直接材料費20,000円、直接労務費15,000円、製造間接費10,000円が集計された。仕損費はいくらか。
ア：20,000円（直接材料費だけを用いる計算）
イ：45,000円（補修指図書に集計された製造原価20,000＋15,000＋10,000＝45,000）
ウ：35,000円（製造間接費を含めない計算）
エ：10,000円（製造間接費だけを用いる計算）

答え・解説　　正答：イ

ア：直接材料費だけ。
イ：補修指図書に集計された製造原価20,000＋15,000＋10,000＝45,000円が仕損費。
ウ：製造間接費を含めていない。
エ：製造間接費だけ。
総合解説：補修指図書を発行する場合、その補修指図書に集計された製造原価が仕損費となる。

問題 0015　（難易度 1）

製造指図書No.Xの製品が全部仕損となり、代品製作のため新しい製造指図書を発行した。旧製造指図書No.Xに集計された製造原価は180,000円、仕損品の評価額は20,000円である。仕損費はいくらか。
ア：180,000円（評価額20,000円を控除しない計算）
イ：20,000円（仕損品評価額をそのまま用いる考え方）
ウ：160,000円（全部仕損では旧指図書原価180,000円から仕損品評価額20,000円を控除して16）
エ：200,000円（評価額を加算する計算）

答え・解説　　正答：ウ

ア：評価額20,000円を控除していない。
イ：仕損品評価額そのもの。
ウ：全部仕損では旧指図書原価180,000円から仕損品評価額20,000円を控除して160,000円。
エ：評価額を加算している。
総合解説：代品製造指図書を発行し旧指図書全部が仕損となった場合は旧指図書原価を基礎とし、仕損品に価値があればその評価額を控除する。

問題 0016　（難易度 2）

製造指図書の一部が仕損となり、その代品製作用に新製造指図書を発行した。新製造指図書に集計された製造原価が70,000円、仕損品の利用価値が10,000円である。仕損費はいくらか。
ア：70,000円（利用価値を控除しない計算）
イ：10,000円（利用価値だけを用いる計算）
ウ：80,000円（利用価値を加算する計算）
エ：60,000円（一部仕損で代品製作の新指図書を発行した場合）

答え・解説　　正答：エ

ア：利用価値を控除していない。
イ：利用価値だけ。
ウ：利用価値を加算している。
エ：一部仕損で代品製作の新指図書を発行した場合、新指図書原価70,000円から仕損品利用価値10,000円を控除。
総合解説：一部仕損で代品製作の新指図書を発行する場合、新指図書に集計された製造原価が仕損費の基礎となる。

問題 0017　（難易度 2）

仕損の補修に別個の補修指図書を発行しない場合、仕損費の計算として最も適切なものはどれか。
ア：補修等に要する製造原価を見積もって仕損費とする。
イ：仕損費は必ず0円とする。
ウ：売上高を仕損費とする。
エ：資本金の1%を仕損費とする。

答え・解説　　正答：ア

ア：原価計算基準は別個の指図書を発行しない場合、補修等に要する製造原価を見積もる。
イ：見積額による計算を行う。
ウ：製造上の追加原価を対象とする。
エ：そのような計算方法ではない。
総合解説：補修・代品のための別個の指図書を発行しない場合でも、必要な製造原価を見積もり仕損費を算定する。

問題 0018　（難易度 2）

代品製作に係る仕損費の基礎となる製造原価が100,000円で、仕損品を15,000円で売却できると見積もられている。仕損費はいくらか。
ア：100,000円（売却価値を控除しない計算）
イ：85,000円（100,000－15,000＝85,000円）
ウ：115,000円（売却価値を加算する計算）
エ：15,000円（仕損品の評価額だけを用いる計算）

答え・解説　　正答：イ

ア：売却価値を控除していない。
イ：100,000－15,000＝85,000円。仕損品に売却価値がある場合は控除する。
ウ：売却価値を加算している。
エ：仕損品の評価額だけ。
総合解説：仕損品に売却価値または利用価値がある場合、その見積額を仕損費から控除する。

問題 0019　（難易度 2）

特定の顧客注文に固有の原因で仕損が生じ、その仕損費を当該製造指図書に賦課する方針である。最も適切な処理はどれか。
ア：仕損費を必ず本社一般管理費とする。
イ：仕損費を資本金から直接控除する。
ウ：仕損費を当該指図書の製造原価に加算し、その注文品が負担する。
エ：仕損費を売上高へ加算する。

答え・解説　正答：ウ

ア：当該指図書に賦課する方針に反する。
イ：製造原価の処理ではない。
ウ：原価計算基準で認められる仕損費処理の一つ。
エ：収益ではない。
総合解説：仕損費は、その原因・負担関係に応じ、当該指図書へ直接賦課する方法がある。

問題 0020　（難易度 2）

仕損が特定の注文だけに起因せず、当該製造部門で通常発生する共通的なものとして、仕損費を間接費処理する方針である。最も適切な処理はどれか。
ア：特定の一つの指図書へ全額賦課する。
イ：仕損費を売上高から直接控除する。
ウ：仕損費を現金勘定へ振り替える。
エ：仕損費を製造間接費として仕損の発生部門に賦課し、予定配賦率等を通じて各指図書へ負担させる。

答え・解説　正答：エ

ア：共通的な仕損という条件と合わない。
イ：製造原価上の処理ではない。
ウ：現金の増減を示すものではない。
エ：原価計算基準は仕損費を間接費として発生部門へ賦課する方法も認める。
総合解説：共通的・正常的な仕損を間接費として処理する場合、発生部門の製造間接費に含めて各指図書へ配賦する。

問題 0021　（難易度 3）

補修指図書に集計された製造原価40,000円を仕損費とし、その全額を元の製造指図書に負担させる。仕損費をいったん仕損費勘定に集計済みとする。適切な振替仕訳はどれか。
ア：（借）仕掛品40,000 ／（貸）仕損費40,000
イ：（借）仕損費40,000 ／（貸）仕掛品40,000
ウ：（借）製造間接費40,000 ／（貸）仕損費40,000
エ：（借）売上原価40,000 ／（貸）仕損費40,000

答え・解説　　正答：ア

ア：元の製造指図書へ賦課するため仕掛品を増加させ、仕損費を振り替える。
イ：賦課時の方向が逆。
ウ：本問は当該指図書へ直接賦課する条件。
エ：販売済みとは限らず、指定処理にも反する。
総合解説：仕損費を特定指図書へ賦課する場合、仕掛品勘定へ振り替えて当該注文品の製造原価に含める。

問題 0022　（難易度 3）

一部仕損の代品製作のため新製造指図書を発行し、そこに直接材料費30,000円、直接労務費20,000円、製造間接費15,000円が集計された。仕損品の利用価値5,000円を控除し、仕損費は元の指図書に賦課する。元の指図書へ追加される仕損費はいくらか。
ア：65,000円（利用価値を控除しない計算）
イ：60,000円（新指図書原価65,000円－利用価値5,000円＝60,000円）
ウ：55,000円（製造間接費または利用価値の処理を別の基準で行う計算）
エ：5,000円（利用価値だけを用いる計算）

答え・解説　　正答：イ

ア：利用価値を控除していない。
イ：新指図書原価65,000円－利用価値5,000円＝60,000円。
ウ：製造間接費または利用価値の処理を誤っている。
エ：利用価値だけ。
総合解説：仕損費総合では、まず仕損形態に応じた製造原価を求め、仕損品評価額を控除し、その後指定された負担方法で処理する。

問題 0023　（難易度 1）

個別原価計算における作業屑について、最も適切な説明はどれか。
ア：完成製品そのもの
イ：製造中の正常な仕掛品すべて
ウ：製造工程から副次的に生じる切削屑・端材などで、売却価値や利用価値を持つことがあるもの
エ：顧客から受け取る売掛金

答え・解説　　正答：ウ

ア：作業屑は主製品ではない。
イ：仕掛品とは異なる。
ウ：作業屑は製造過程で副次的に生じる価値ある屑をいう。
エ：製造工程の副産物ではない。
総合解説：作業屑は製造過程で発生する端材等で、評価額を原価から控除する処理を行う。

問題 0024　（難易度 1）

個別原価計算における作業屑の原則的な処理として、最も適切なものはどれか。
ア：評価額を製造原価へ必ず加算する。
イ：評価額を資本金へ加算する。
ウ：作業屑は価値があっても必ず無視する。
エ：作業屑を評価し、その評価額を発生部門の部門費から控除する。

答え・解説　　正答：エ

ア：作業屑価値は原価を減少させる方向。
イ：資本取引ではない。
ウ：評価して原価控除するのが原則。
エ：原価計算基準では原則として発生部門の部門費から控除する。
総合解説：作業屑は評価し、その価値を発生部門の原価から控除することで、主製品が負担する原価を減額する。

問題 0025　（難易度 2）

特定の製造指図書から発生した作業屑であることが明確で、必要に応じその指図書へ直接関連づけて処理する場合、認められる方法はどれか。
ア：作業屑評価額を当該製造指図書の直接材料費から控除する。
イ：必ず売上高へ加算する。
ウ：当該指図書の直接労務費へ加算する。
エ：仕損費へ必ず振り替える。

答え・解説　　正答：ア

ア：原価計算基準は必要ある場合、当該指図書の直接材料費から控除することを認める。
イ：作業屑価値は原価控除として処理できる。
ウ：価値を原価へ加算する処理ではない。
エ：作業屑と仕損費は別概念。
総合解説：作業屑が特定指図書に明確に帰属する場合は、その直接材料費または製造原価から控除することができる。

問題 0026　（難易度 2）

作業屑評価額を特定の製造指図書へ直接対応させる場合の処理として、最も適切なものはどれか。
ア：必ず製造原価へ同額を加算する。
イ：当該製造指図書の製造原価から控除する方法も認められる。
ウ：必ず営業外収益とし、製造原価には反映しない。
エ：作業屑は必ず廃棄し評価してはならない。

答え・解説　　正答：イ

ア：作業屑価値は原価を減らす。
イ：原価計算基準は直接材料費または製造原価から控除する方法を認める。
ウ：個別原価計算では原価控除処理が認められる。
エ：価値があれば評価する。
総合解説：作業屑の帰属が明確な場合は、発生部門費からの控除だけでなく、当該指図書の製造原価から直接控除することもできる。

問題 0027　（難易度 2）

加工部門から作業屑が発生し、評価額は18,000円である。加工部門の作業屑控除前部門費が500,000円の場合、控除後部門費はいくらか。
ア：518,000円（作業屑評価額を加算する計算）
イ：500,000円（作業屑価値を反映しない計算）
ウ：482,000円（500,000－18,000＝482,000円）
エ：18,000円（作業屑評価額をそのまま用いる考え方）

答え・解説　　正答：ウ

ア：作業屑評価額を加算している。
イ：作業屑価値を反映していない。
ウ：500,000－18,000＝482,000円。
エ：作業屑評価額そのもの。
総合解説：作業屑の評価額を発生部門費から控除すると、その分だけ製品へ配賦される部門費が減少する。

問題 0028　（難易度 2）

特定指図書から発生した作業屑12,000円を再利用可能な材料として評価し、当該指図書の製造原価から控除する。適切な仕訳はどれか。
ア：（借）仕掛品12,000 ／（貸）材料12,000
イ：（借）売上原価12,000 ／（貸）材料12,000
ウ：（借）仕損費12,000 ／（貸）仕掛品12,000
エ：（借）材料12,000 ／（貸）仕掛品12,000

答え・解説　　正答：エ

ア：原価を増加させる方向で逆。
イ：販売ではない。
ウ：作業屑を仕損費として扱っている。
エ：再利用可能な作業屑を材料として資産計上し、当該指図書の製造原価を減額する。
総合解説：作業屑を再利用可能な材料として評価する場合、材料を受け入れ、対応する指図書原価等を控除する。

問題 0029　（難易度 3）

仕損品と作業屑の違いとして、最も適切な説明はどれか。
ア：仕損品は予定した製品として不合格となったもの、作業屑は製造過程で副次的に生じる端材等である。
イ：両者は完全に同一で、会計処理も必ず同じである。
ウ：作業屑は完成品の別名である。
エ：仕損品は必ず価値があり、作業屑は必ず無価値である。

答え・解説　　正答：ア

ア：両者は発生の性質が異なる。
イ：仕損費の計算と作業屑評価は区別される。
ウ：主製品ではない。
エ：いずれも価値の有無はケースによる。
総合解説：仕損は予定製品の失敗・不合格、作業屑は製造から副次的に発生する端材等であり、原価計算上の扱いを区別する。

問題 0030　（難易度 3）

製造指図書No.Zの作業屑控除前製造原価が420,000円である。同指図書から発生した作業屑を15,000円と評価し、製造原価から直接控除する。さらに補修仕損費25,000円を同指図書へ賦課する。最終的な指図書原価はいくらか。
ア：380,000円（仕損費まで控除している）
イ：430,000円（420,000－15,000＋25,000＝430,000円）
ウ：460,000円（作業屑評価額を加算する計算）
エ：420,000円（作業屑と仕損費を反映しない計算）

答え・解説　　正答：イ

ア：仕損費まで控除している。
イ：420,000－15,000＋25,000＝430,000円。
ウ：作業屑評価額を加算している。
エ：作業屑と仕損費を反映していない。
総合解説：個別原価計算では、作業屑評価額は原価を減額し、当該指図書へ賦課する仕損費は原価を増額するため、両者の方向を区別する。

問題 0031　（難易度 1）

同一規格の製品を一つの工程で反復・連続して大量生産している。この生産形態に最も適する原価計算の考え方を選びなさい。
ア：顧客ごとに仕様が異なる大型設備を個別受注生産する形態
イ：製造を行わず商品の売買だけを行う形態
ウ：同種製品を反復継続して大量生産する生産形態
エ：製品ごとの原価を一切計算しない形態

答え・解説　　正答：ウ

ア：個別原価計算が適する。
イ：製造原価計算の方法ではない。
ウ：単純総合原価計算は同種製品を反復連続的に生産する形態に適用される。
エ：総合原価計算でも単位原価を計算する。
総合解説：単純総合原価計算では、一原価計算期間の製造費用を完成品と期末仕掛品へ配分し、同種製品の単位原価を算定する。

問題 0032　（難易度 1）

総合原価計算の平均法について、最も適切な説明はどれか。
ア：月初仕掛品に係る前月原価を必ず当月原価と完全に分離する。
イ：月末仕掛品を常に0円とする。
ウ：材料費だけを計算し加工費は無視する。
エ：月初仕掛品原価と当月製造費用を合算し、月初仕掛品と当月投入分を区別せず平均的に完成品と月末仕掛品へ配分する。

答え・解説　　正答：エ

ア：これは先入先出法の考え方に近い。
イ：月末仕掛品があれば完成品換算量で評価する。
ウ：材料費・加工費等を計算する。
エ：平均法は前月からの原価と当月原価を混合して平均単価を計算する。
総合解説：平均法では月初仕掛品原価と当月製造費用を合算し、完成品換算量により平均的に完成品・月末仕掛品へ配分する。

問題 0033　（難易度 1）

当月完成品800個、月末仕掛品200個である。材料は工程の始点ですべて投入される。材料費の完成品換算量はいくらか。
ア：1,000個（完成品800個＋月末仕掛品200個＝1,000個）
イ：900個（加工進捗度50%を材料にも適用したような計算）
ウ：800個（月末仕掛品の材料換算量を含めない計算）
エ：200個（月末仕掛品だけを用いる計算）

答え・解説　　正答：ア

ア：完成品800個＋月末仕掛品200個＝1,000個。始点投入なので月末仕掛品も材料は100%投入済み。
イ：加工進捗度50%を材料にも適用したような計算。
ウ：月末仕掛品の材料換算量を含めていない。
エ：月末仕掛品だけ。
総合解説：材料を工程始点で全量投入する場合、月末仕掛品は加工進捗度にかかわらず材料費について100%の完成品換算量を持つ。

問題 0034　（難易度 1）

当月完成品800個、月末仕掛品200個、月末仕掛品の加工進捗度50%である。加工費の完成品換算量はいくらか。
ア：1,000個（月末仕掛品を100%としている）
イ：900個（完成品800個＋200個×50%＝900個）
ウ：800個（月末仕掛品換算量100個を含めない計算）
エ：100個（月末仕掛品の加工費換算量だけを用いる計算）

答え・解説　　正答：イ

ア：月末仕掛品を100%としている。
イ：完成品800個＋200個×50%＝900個。
ウ：月末仕掛品換算量100個を含めていない。
エ：月末仕掛品の加工費換算量だけ。
総合解説：加工費が工程を通じて進捗に応じて発生する場合、月末仕掛品数量へ加工進捗度を乗じて完成品換算量を求める。

問題 0035　（難易度 2）

平均法を採用している。月初仕掛品材料費40,000円、当月材料費360,000円、材料費の完成品換算量1,000個である。材料費の完成品換算量1個当たり原価はいくらか。
ア：360円（月初仕掛品材料費を含めない計算）
イ：40円（月初仕掛品材料費だけを用いている）
ウ：400円（(40,000＋360,000)÷1,000＝400円）
エ：1,000円（完成品換算量を単価としている）

答え・解説　　正答：ウ

ア：月初仕掛品材料費を含めていない。
イ：月初仕掛品材料費だけを用いている。
ウ：(40,000＋360,000)÷1,000＝400円。
エ：完成品換算量を単価としている。
総合解説：平均法では月初仕掛品原価と当月製造費用を合算し、完成品換算量で除して平均単価を求める。

問題 0036　（難易度 2）

平均法を採用している。月初仕掛品加工費12,000円、当月加工費258,000円、加工費の完成品換算量900個である。加工費の完成品換算量1個当たり原価はいくらか。
ア：286.67円（当月加工費258,000円だけを900個で除している）
イ：270円（合計加工費270,000円を1,000個で除した別処理）
ウ：900円（換算量を単価としている）
エ：300円（(12,000＋258,000)÷900＝300円）

答え・解説　　正答：エ

ア：当月加工費258,000円だけを900個で除している。
イ：合計加工費270,000円を1,000個で除した誤り。
ウ：換算量を単価としている。
エ：(12,000＋258,000)÷900＝300円。
総合解説：平均法の加工費単価は、月初加工費と当月加工費の合計を加工費完成品換算量で除して求める。

問題 0037　（難易度 2）

材料は始点投入、加工費は進捗度に応じて発生する。材料費単価400円、加工費単価300円、月末仕掛品200個、加工進捗度50%である。月末仕掛品原価はいくらか。
ア：110,000円（材料200×400＝80,000円、加工200×50%×300＝30,000円）
イ：140,000円（加工費も100%完成としている）
ウ：80,000円（加工費30,000円を含めない計算）
エ：60,000円（材料費を進捗度50%で計算している）

答え・解説　　正答：ア

ア：材料200×400＝80,000円、加工200×50%×300＝30,000円、合計110,000円。
イ：加工費も100%完成としている。
ウ：加工費30,000円を含めていない。
エ：材料費を進捗度50%で計算している。
総合解説：月末仕掛品原価は、原価要素ごとの投入形態・進捗度に対応した完成品換算量に単価を乗じて求める。

問題 0038　（難易度 2）

平均法で材料費単価400円、加工費単価300円、当月完成品800個である。完成品原価はいくらか。
ア：320,000円（材料費だけを用いる計算）
イ：560,000円（800個×(400＋300)＝560,000円）
ウ：240,000円（加工費だけを用いる計算）
エ：700,000円（1個当たり原価700円を数量に乗じていない）

答え・解説　　正答：イ

ア：材料費だけ。
イ：800個×(400＋300)＝560,000円。
ウ：加工費だけ。
エ：1個当たり原価700円を数量に乗じていない。
総合解説：完成品は材料費・加工費とも100%完成しているため、各完成品換算単価の合計を完成数量へ乗じる。

問題 0039　（難易度 2）

単純総合原価計算により当月完成品原価560,000円が計算された。完成品への振替仕訳として適切なものはどれか。
ア：（借）仕掛品560,000 ／（貸）製品560,000
イ：（借）売上原価560,000 ／（貸）仕掛品560,000
ウ：（借）製品560,000 ／（貸）仕掛品560,000
エ：（借）材料560,000 ／（貸）仕掛品560,000

答え・解説　　正答：ウ

ア：完成時の方向が逆。
イ：完成しただけで販売していない。
ウ：完成した製造原価を仕掛品から製品へ振り替える。
エ：完成品を材料へ戻さない。
総合解説：総合原価計算でも完成品原価は仕掛品勘定から製品勘定へ振り替える。

問題 0040　（難易度 2）

平均法により完成品原価560,000円、月末仕掛品原価110,000円と計算された。月初仕掛品原価と当月製造費用の合計が670,000円である。この計算について最も適切な説明はどれか。
ア：完成品原価だけが670,000円と一致しなければならない。
イ：月末仕掛品原価は原価総額に含めない。
ウ：原価総額と配分結果は一致する必要がない。
エ：560,000＋110,000＝670,000円となり、配分対象原価と配分結果が一致している。

答え・解説　　正答：エ

ア：月末仕掛品にも原価が残る。
イ：未完成分も棚卸資産として原価を負担する。
ウ：原価計算では整合確認が重要。
エ：原価の総額は完成品と月末仕掛品へ漏れなく配分される。
総合解説：総合原価計算では、配分すべき原価総額が完成品原価と月末仕掛品原価の合計に一致するか確認する。

問題 0041　（難易度 3）

月初仕掛品100個（材料費40,000円、加工費12,000円）、当月投入900個、当月完成800個、月末仕掛品200個（加工進捗度50%）。材料は始点投入。当月材料費360,000円、当月加工費258,000円。平均法による完成品原価はいくらか。
ア：560,000円（材料単価=(40,000+360,000)/1,000=400円）
イ：550,000円（先入先出法の完成品原価として扱う考え方）
ウ：670,000円（配分対象原価総額）
エ：110,000円（月末仕掛品原価）

答え・解説　　正答：ア

ア：材料単価=(40,000+360,000)/1,000=400円、加工単価=(12,000+258,000)/900=300円。完成品800×700＝560,000円。
イ：先入先出法の完成品原価と混同している。
ウ：配分対象原価総額。
エ：月末仕掛品原価。
総合解説：平均法では月初仕掛品原価と当月製造費用を合算して平均単価を求めるため、月初仕掛品の前月原価を区別しない。

問題 0042　（難易度 3）

材料は始点投入。月初仕掛品原価52,000円（材料40,000円、加工12,000円）、当月材料費360,000円、当月加工費258,000円。当月完成800個、月末仕掛品200個・加工進捗度50%である。平均法による完成品原価と月末仕掛品原価の組合せはどれか。
ア：完成品550,000円、月末仕掛品110,000円（先入先出法の完成品原価を混在させている）
イ：完成品560,000円、月末仕掛品110,000円（完成品560,000円、月末80,000＋30,000＝110,000円）
ウ：完成品560,000円、月末仕掛品140,000円（月末仕掛品加工費を100%としている）
エ：完成品670,000円、月末仕掛品0円（月末仕掛品へ原価配分していない）

答え・解説　　正答：イ

ア：先入先出法の完成品原価を混在させている。
イ：平均材料単価400円、加工単価300円。完成品560,000円、月末80,000＋30,000＝110,000円。
ウ：月末仕掛品加工費を100%としている。
エ：月末仕掛品へ原価配分していない。
総合解説：平均法では原価要素別の完成品換算量と平均単価を求め、完成品と月末仕掛品へ原価を配分する。

問題 0043　（難易度 1）

総合原価計算の先入先出法（2級範囲の（修正）先入先出法）の考え方として、最も適切なものはどれか。
ア：月初仕掛品原価と当月原価を必ず合算して平均単価を求める。
イ：月初仕掛品を存在しなかったものとして無視する。
ウ：月初仕掛品に含まれる前月までの原価と当月製造費用を区別し、当月作業分の完成品換算量で当月原価単価を計算する。
エ：月末仕掛品は常に0円とする。

答え・解説　　正答：ウ

ア：これは平均法。
イ：月初仕掛品の原価と当月完成作業を考慮する。
ウ：先入先出法は前月原価と当月原価を区別する。
エ：月末仕掛品も当月原価を負担する。
総合解説：先入先出法では、月初仕掛品の前月原価を保持しつつ、当月追加作業に係る原価を当月完成品換算量で配分する。

問題 0044　（難易度 1）

月初仕掛品100個の加工進捗度が40%である。当月にこれらをすべて完成させた。先入先出法で、月初仕掛品を完成させるための当月加工費完成品換算量はいくらか。
ア：40個（前月までに完了していた加工分）
イ：100個（当月に100%加工したわけとして扱う考え方）
ウ：140個（数量と進捗度を別の方法で加算している）
エ：60個（100個×(100%−40%)＝60個）

答え・解説　　正答：エ

ア：前月までに完了していた加工分。
イ：当月に100%加工したわけではない。
ウ：数量と進捗度を誤って加算している。
エ：100個×(100%−40%)＝60個。
総合解説：先入先出法では、月初仕掛品について当月中に追加して完成させる作業分だけを当月完成品換算量に含める。

問題 0045　（難易度 1）

月初仕掛品100個、当月完成品800個で、月初仕掛品はすべて当月完成した。先入先出法で当月着手・当月完成した数量はいくらか。
ア：700個（完成品800個－月初仕掛品完成100個＝700個）
イ：800個（月初仕掛品100個を除いていない）
ウ：900個（当月投入量として扱う考え方）
エ：100個（月初仕掛品数量だけを用いる計算）

答え・解説　　正答：ア

ア：完成品800個－月初仕掛品完成100個＝700個。
イ：月初仕掛品100個を除いていない。
ウ：当月投入量と混同している。
エ：月初仕掛品数量だけ。
総合解説：先入先出法では完成品を、月初仕掛品から完成した分と当月着手・当月完成分に分けて把握する。

問題 0046　（難易度 2）

月初仕掛品100個、当月着手・当月完成700個、月末仕掛品200個である。材料は工程始点で全量投入され、月初仕掛品には前月中に材料投入済みである。先入先出法の当月材料費完成品換算量はいくらか。
ア：1,000個（月初仕掛品100個まで当月材料投入としている）
イ：900個（当月着手完成700個＋月末200個＝900個）
ウ：800個（月末仕掛品200個を一部しか含めていない）
エ：700個（月末仕掛品の材料投入を含めない計算）

答え・解説　　正答：イ

ア：月初仕掛品100個まで当月材料投入としている。
イ：月初仕掛品には当月材料投入なし。当月着手完成700個＋月末200個＝900個。
ウ：月末仕掛品200個を一部しか含めていない。
エ：月末仕掛品の材料投入を含めていない。
総合解説：材料が始点投入で月初仕掛品に既に投入済みなら、先入先出法の当月材料換算量には月初仕掛品を含めない。

問題 0047　（難易度 2）

月初仕掛品100個（加工進捗度40%）、当月着手・当月完成700個、月末仕掛品200個（加工進捗度50%）である。先入先出法の当月加工費完成品換算量はいくらか。
ア：900個（平均法の加工費換算量）
イ：800個（月初完成作業・月末作業を十分反映していない）
ウ：860個（月初完成60＋当月着手完成700＋月末100＝860個）
エ：1,000個（月末仕掛品を100%としている）

答え・解説　　正答：ウ

ア：平均法の加工費換算量。
イ：月初完成作業・月末作業を十分反映していない。
ウ：月初完成60＋当月着手完成700＋月末100＝860個。
エ：月末仕掛品を100%としている。
総合解説：先入先出法の当月加工換算量は、月初仕掛品の残作業＋当月着手完成＋月末仕掛品当月作業分で求める。

問題 0048　（難易度 2）

先入先出法を採用している。当月材料費360,000円、当月材料費完成品換算量900個である。当月材料費の換算量1個当たり原価はいくらか。
ア：360円（当月材料費を1,000個で除している）
イ：444.44円（別った換算量810個等を用いた値）
ウ：900円（完成品換算量を単価としている）
エ：400円（360,000÷900＝400円）

答え・解説　　正答：エ

ア：当月材料費を1,000個で除している。
イ：誤った換算量810個等を用いた値。
ウ：完成品換算量を単価としている。
エ：360,000÷900＝400円。
総合解説：先入先出法では当月発生原価だけを当月完成品換算量で除して当月単価を計算する。

問題 0049　（難易度 2）

先入先出法を採用している。当月加工費258,000円、当月加工費完成品換算量860個である。当月加工費単価はいくらか。
ア：300円（258,000÷860＝300円）
イ：286.67円（平均法の900個で除した値に近い）
ウ：258円（1,000個で除している）
エ：860円（完成品換算量をそのまま用いる考え方）

答え・解説　　正答：ア

ア：258,000÷860＝300円。
イ：平均法の900個で除した値に近い。
ウ：1,000個で除している。
エ：完成品換算量そのもの。
総合解説：先入先出法の当月加工費単価は、当月加工費を当月加工完成品換算量で除して求める。

問題 0050　（難易度 2）

月初仕掛品100個の前月繰越原価は材料30,000円、加工12,000円。加工進捗度40%で、当月加工費単価は300円。材料は前月中に始点投入済みである。月初仕掛品100個を当月完成させた原価はいくらか。
ア：42,000円（当月追加加工費を含めない計算）
イ：60,000円（前月原価42,000円＋当月追加加工60換算個×300円＝18,000円）
ウ：72,000円（当月加工を100個分追加している）
エ：90,000円（材料費を当月も再度投入している）

答え・解説　　正答：イ

ア：当月追加加工費を含めていない。
イ：前月原価42,000円＋当月追加加工60換算個×300円＝18,000円、合計60,000円。
ウ：当月加工を100個分追加している。
エ：材料費を当月も再度投入している。
総合解説：先入先出法で月初仕掛品を完成させる原価は、前月繰越原価に当月の残加工原価等を加えて求める。

問題 0051　（難易度 3）

材料は始点投入。当月材料費単価400円、当月加工費単価300円、月末仕掛品200個・加工進捗度50%である。先入先出法による月末仕掛品原価はいくらか。
ア：120,000円（加工費換算量や材料費の扱いを別の基準で行う計算）
イ：95,000円（加工費を25%相当など別った進捗度で計算した金額）
ウ：110,000円（材料200×400＝80,000円、加工200×50%×300＝30,000円）
エ：75,000円（材料費または加工費の一部を過少計上している）

答え・解説　　正答：ウ

ア：加工費換算量や材料費の扱いを誤っている。
イ：加工費を25%相当など誤った進捗度で計算した金額。
ウ：材料200×400＝80,000円、加工200×50%×300＝30,000円、合計110,000円。
エ：材料費または加工費の一部を過少計上している。
総合解説：月末仕掛品は当月着手分として、当月単価に原価要素別完成品換算量を乗じて評価する。

問題 0052　（難易度 3）

月初仕掛品100個（前月原価42,000円、加工進捗度40%）、当月着手900個、完成800個、月末仕掛品200個（加工進捗度50%）。材料は始点投入。当月材料費360,000円、当月加工費258,000円。先入先出法による完成品原価と月末仕掛品原価の組合せはどれか。
ア：完成品560,000円、月末仕掛品110,000円（平均法の完成品原価を混同している）
イ：完成品550,000円、月末仕掛品140,000円（月末加工費を100%としている）
ウ：完成品660,000円、月末仕掛品0円（月末仕掛品へ原価を配分していない）
エ：完成品550,000円、月末仕掛品110,000円（月初完成60,000円、当月着手完成700×700＝490,000円）

答え・解説　　正答：エ

ア：平均法の完成品原価を混同している。
イ：月末加工費を100%としている。
ウ：月末仕掛品へ原価を配分していない。
エ：当月単価は材料400円・加工300円。月初完成60,000円、当月着手完成700×700＝490,000円、完成品計550,000円。月末110,000円。
総合解説：先入先出法では前月原価と当月原価を区別し、月初仕掛品完成分、当月着手完成分、月末仕掛品へ順に当月原価を配分する。

問題 0053　（難易度 1）

総合原価計算における完成品換算量の説明として、最も適切なものはどれか。
ア：仕掛品の加工進捗度などを考慮し、未完成品を完成品何個分の作業量に相当するかへ換算した数量
イ：完成品の販売価格を数量へ換算したもの
ウ：材料購入量だけを表す数量
エ：常に実際の物量と完全に同じ数量

答え・解説　　正答：ア

ア：完成品換算量は未完成品の進捗を完成品数量へ換算する概念。
イ：販売価格とは無関係。
ウ：加工費などの換算量にも用いる。
エ：仕掛品では進捗度により物量と異なる。
総合解説：完成品換算量を用いることで、完成品と未完成の仕掛品に製造原価を合理的に配分できる。

問題 0054　（難易度 1）

当月完成品500個の加工費完成品換算量として正しいものはどれか。
ア：250個（完成品へ50%の進捗度を適用している）
イ：500個（完成品は加工が100%完了しているため実数量と換算量が一致する）
ウ：0個（完成済みなので換算量は0として扱う考え方）
エ：1,000個（完成数量の2倍にする根拠がない）

答え・解説　　正答：イ

ア：完成品へ50%の進捗度を適用している。
イ：完成品は加工が100%完了しているため実数量と換算量が一致する。
ウ：完成済みなので換算量は0ではない。
エ：完成数量の2倍にする根拠がない。
総合解説：完成品は各原価要素について必要な投入・加工が完了しているため、原則として実数量がそのまま完成品換算量となる。

問題 0055　（難易度 2）

月末仕掛品300個、加工進捗度40%である。加工費の完成品換算量はいくらか。
ア：300個（進捗度を考慮していない）
イ：180個（未完成率60%を用いている）
ウ：120個（300×40%＝120個）
エ：40個（進捗度40%を数量として扱っている）

答え・解説　　正答：ウ

ア：進捗度を考慮していない。
イ：未完成率60%を用いている。
ウ：300×40%＝120個。
エ：進捗度40%を数量として扱っている。
総合解説：加工費完成品換算量は、月末仕掛品数量に加工進捗度を乗じて求める。

問題 0056　（難易度 2）

月末仕掛品300個、加工進捗度40%である。材料は工程の始点で全量投入される。材料費の完成品換算量はいくらか。
ア：120個（加工進捗度40%を材料費にも適用している）
イ：180個（未完成率を用いている）
ウ：0個（材料はすでに投入済み）
エ：300個（始点投入なので加工進捗度にかかわらず材料は全量投入済み）

答え・解説　　正答：エ

ア：加工進捗度40%を材料費にも適用している。
イ：未完成率を用いている。
ウ：材料はすでに投入済み。
エ：始点投入なので加工進捗度にかかわらず材料は全量投入済み。
総合解説：材料の投入時点と加工費の進捗は別に考え、始点投入材料では月末仕掛品の材料換算量は実数量と一致する。

問題 0057　（難易度 2）

材料が加工の進捗に応じて工程を通じて均等に投入されるものとする。月末仕掛品250個、進捗度60%のとき、材料費の完成品換算量はいくらか。
ア：150個（250×60%＝150個）
イ：250個（始点投入として扱う考え方）
ウ：100個（未完成率40%を用いている）
エ：60個（進捗度をそのまま数量としている）

答え・解説　　正答：ア

ア：250×60%＝150個。均等投入なら材料投入度も進捗度に対応する。
イ：始点投入と混同している。
ウ：未完成率40%を用いている。
エ：進捗度をそのまま数量としている。
総合解説：材料の投入形態が始点投入か均等投入かによって、月末仕掛品の材料費完成品換算量は変わる。

問題 0058　（難易度 2）

月末仕掛品200個、加工進捗度30%、材料は始点投入である。この月末仕掛品の材料費換算量と加工費換算量の組合せはどれか。
ア：材料60個、加工200個（材料と加工の条件を反対にする計算）
イ：材料200個、加工60個（材料は始点投入で200個、加工は200×30%＝60個）
ウ：材料200個、加工200個（加工進捗度30%を無視している）
エ：材料60個、加工60個（材料にも加工進捗度を適用している）

答え・解説　　正答：イ

ア：材料と加工の条件を逆にしている。
イ：材料は始点投入で200個、加工は200×30%＝60個。
ウ：加工進捗度30%を無視している。
エ：材料にも加工進捗度を適用している。
総合解説：完成品換算量は原価要素別に計算し、材料投入形態と加工進捗度をそれぞれ反映する。

問題 0059　（難易度 3）

平均法を前提とする。当月完成品700個、月末仕掛品300個・加工進捗度40%である。加工費の総完成品換算量はいくらか。
ア：1,000個（月末仕掛品を100%としている）
イ：700個（月末仕掛品換算量120個を含めない計算）
ウ：820個（700＋300×40%＝820個）
エ：120個（月末仕掛品換算量だけを用いる計算）

答え・解説　　正答：ウ

ア：月末仕掛品を100%としている。
イ：月末仕掛品換算量120個を含めていない。
ウ：700＋300×40%＝820個。
エ：月末仕掛品換算量だけ。
総合解説：平均法の加工費単価計算では、完成品数量と月末仕掛品の加工費換算量を合計した数量を用いる。

問題 0060　（難易度 3）

平均法。完成品600個、月末仕掛品200個・加工進捗度25%、材料は始点投入。材料費総額320,000円、加工費総額195,000円である。月末仕掛品原価はいくらか。
ア：140,000円（月末加工を100%としている）
イ：80,000円（加工費15,000円を含めない計算）
ウ：515,000円（原価総額をそのまま月末仕掛品としている）
エ：95,000円（月末＝200×400＋200×25%×300＝80,000＋15,000＝95,00）

答え・解説　　正答：エ

ア：月末加工を100%としている。
イ：加工費15,000円を含めていない。
ウ：原価総額をそのまま月末仕掛品としている。
エ：材料換算量800個→単価400円。加工換算量650個→単価300円。月末＝200×400＋200×25%×300＝80,000＋15,000＝95,000円。
総合解説：完成品換算量を原価要素ごとに算定して単価を求め、その単価を月末仕掛品の各換算量へ乗じて原価を配分する。

問題 0061　（難易度 1）

工程別総合原価計算について、最も適切な説明はどれか。
ア：製品が複数の連続した製造工程を通過する場合に、工程ごとに原価を集計して製品原価を計算する方法
イ：顧客注文ごとに製造指図書を発行して原価を集計する方法
ウ：製品の販売価格だけを工程別に分ける方法
エ：一つの工程しかない場合にしか使えない方法

答え・解説　　正答：ア

ア：工程別総合原価計算は製造段階ごとに原価を把握する。
イ：これは個別原価計算。
ウ：製造原価を工程別に計算する。
エ：複数工程を前提とする。
総合解説：工程別総合原価計算では各工程の原価を段階的に計算し、製造工程の進行に応じて原価を次工程へ引き継ぐ。

問題 0062　（難易度 1）

2級範囲の全原価要素工程別総合原価計算における累加法について、最も適切な説明はどれか。
ア：各工程の原価を最後まで完全に独立させ、前工程原価を次工程へ一切引き継がない。
イ：前工程の完成品原価を次工程の前工程費として引き継ぎ、次工程で発生した原価を加えて累積的に原価を計算する。
ウ：工程ごとの原価を売上高へ直接加算する。
エ：前工程費を常に0円とする。

答え・解説　　正答：イ

ア：これは累加法ではない。
イ：累加法では前工程原価を次工程へ順次累加する。
ウ：製品原価へ累積する。
エ：累加法では前工程費が重要。
総合解説：累加法では前工程から振り替えられた原価が次工程の前工程費となり、当該工程費と合算されて最終製品原価へ累積する。

問題 0063　（難易度 1）

第1工程で当月完成900個、月末仕掛品100個・加工進捗度50%。材料は始点投入。当月材料費450,000円、加工費285,000円で、月初仕掛品はない。平均法による第1工程完成品原価はいくらか。
ア：735,000円（当月製造費用全額で、月末仕掛品分を控除しない計算）
イ：405,000円（材料費だけで計算している）
ウ：675,000円（完成品900×750円＝675,000円）
エ：270,000円（加工費だけで計算している）

答え・解説　　正答：ウ

ア：当月製造費用全額で、月末仕掛品分を控除していない。
イ：材料費だけで計算している。
ウ：材料換算量1,000個→450円、加工換算量950個→300円。完成品900×750円＝675,000円。
エ：加工費だけで計算している。
総合解説：工程別総合原価計算でも各工程で完成品・月末仕掛品へ原価を配分し、その工程の完成品原価を次工程へ引き継ぐ。

問題 0064　（難易度 1）

第1工程で材料費単価450円、加工費単価300円、月末仕掛品100個・加工進捗度50%、材料は始点投入である。月末仕掛品原価はいくらか。
ア：75,000円（加工費を100%としている）
イ：45,000円（加工費15,000円を含めない計算）
ウ：30,000円（材料費を50%としている）
エ：60,000円（材料100×450＝45,000円、加工100×50%×300＝15,000円）

答え・解説　　正答：エ

ア：加工費を100%としている。
イ：加工費15,000円を含めていない。
ウ：材料費を50%としている。
エ：材料100×450＝45,000円、加工100×50%×300＝15,000円、合計60,000円。
総合解説：各工程の月末仕掛品は、その工程における材料投入形態と加工進捗度に応じて評価する。

問題 0065　（難易度 2）

第1工程から第2工程へ900個が振り替えられ、第1工程完成品原価は675,000円であった。第2工程で用いる前工程費の1個当たり原価はいくらか。
ア：750円（675,000÷900＝750円）
イ：675円（675,000円を1,000個で割っている）
ウ：900円（振替数量を単価としている）
エ：1,425円（原価と数量の関係を別の基準で行う計算）

答え・解説　　正答：ア

ア：675,000÷900＝750円。
イ：675,000円を1,000個で割っている。
ウ：振替数量を単価としている。
エ：原価と数量の関係を誤っている。
総合解説：累加法では前工程完成品原価が次工程の前工程費となり、振替数量当たりの原価を把握する。

問題 0066　（難易度 2）

第1工程から第2工程へ移された時点で前工程費が全額投入されたものとする。第2工程の月末仕掛品100個が第2工程加工進捗度40%である場合、前工程費の完成品換算量はいくらか。
ア：40個（第2工程加工進捗度40%を前工程費にも適用している）
イ：100個（前工程費は第2工程の始点で全額引き継がれている）
ウ：60個（未完成率を用いている）
エ：0個（前工程費はすでに全額投入済み）

答え・解説　　正答：イ

ア：第2工程加工進捗度40%を前工程費にも適用している。
イ：前工程費は第2工程の始点で全額引き継がれているため、加工進捗度にかかわらず100%。
ウ：未完成率を用いている。
エ：前工程費はすでに全額投入済み。
総合解説：前工程費は次工程の始点で全額投入された原価要素として扱うのが基本で、次工程の加工進捗度とは分けて考える。

問題 0067　（難易度 2）

第2工程で完成品800個、月末仕掛品100個・第2工程加工進捗度40%である。加工費の完成品換算量はいくらか。
ア：900個（月末仕掛品を100%としている）
イ：800個（月末仕掛品の換算量40個を含めない計算）
ウ：840個（800＋100×40%＝840個）
エ：40個（月末仕掛品換算量だけを用いる計算）

答え・解説　　正答：ウ

ア：月末仕掛品を100%としている。
イ：月末仕掛品の換算量40個を含めていない。
ウ：800＋100×40%＝840個。
エ：月末仕掛品換算量だけ。
総合解説：第2工程加工費の完成品換算量は、完成品数量と月末仕掛品の当該工程加工換算量を合計する。

問題 0068　（難易度 2）

第2工程の当月加工費252,000円、加工費完成品換算量840個である。加工費単価はいくらか。
ア：280円（計算前提ア：900個で割った別処理）
イ：315円（計算前提イ：800個で割った別処理）
ウ：840円（計算前提ウ：換算量をそのまま用いる考え方）
エ：300円（計算前提エ：252,000÷840＝300円）

答え・解説　　正答：エ

ア：900個で割った誤り。
イ：800個で割った誤り。
ウ：換算量そのもの。
エ：252,000÷840＝300円。
総合解説：工程別総合原価計算では、当該工程で発生する加工費も完成品換算量で単価計算する。

問題 0069　（難易度 2）

第2工程の前工程費単価750円、第2工程加工費単価300円。月末仕掛品100個、第2工程加工進捗度40%である。月末仕掛品原価はいくらか。
ア：87,000円（前工程費100×750＝75,000円、加工費100×40%×300＝12,000円）
イ：105,000円（加工費を100%としている）
ウ：75,000円（第2工程加工費を含めない計算）
エ：42,000円（前工程費まで40%としている）

答え・解説　　正答：ア

ア：前工程費100×750＝75,000円、加工費100×40%×300＝12,000円、合計87,000円。
イ：加工費を100%としている。
ウ：第2工程加工費を含めていない。
エ：前工程費まで40%としている。
総合解説：次工程の月末仕掛品は、前工程費を100%、当該工程加工費を進捗度に応じて負担するものとして計算する。

問題 0070　（難易度 2）

第2工程の前工程費単価750円、第2工程加工費単価300円、最終完成品800個である。最終完成品原価はいくらか。
ア：600,000円（前工程費だけを用いる計算）
イ：840,000円（800×(750＋300)＝840,000円）
ウ：240,000円（第2工程加工費だけを用いる計算）
エ：1,050,000円（1個当たり原価を数量に乗じていない）

答え・解説　　正答：イ

ア：前工程費だけ。
イ：800×(750＋300)＝840,000円。
ウ：第2工程加工費だけ。
エ：1個当たり原価を数量に乗じていない。
総合解説：累加法では最終工程完成品が前工程費と最終工程加工費の双方を100%負担する。

問題 0071　（難易度 3）

第1工程完成品原価を第2工程へ振り替える処理について、最も適切な説明はどれか。
ア：振替額だけ工場全体の原価が二重に増加する。
イ：振替額を売上高として計上する。
ウ：原価の所在を第1工程から第2工程へ移す内部振替であり、工場全体の製造原価総額そのものを増加させる取引ではない。
エ：振替額を資本金へ振り替える。

答え・解説　　正答：ウ

ア：同じ原価を移すだけ。
イ：内部振替は収益ではない。
ウ：前工程費として次工程へ引き継ぐ内部原価移動。
エ：資本取引ではない。
総合解説：累加法の工程間振替は、原価を次工程へ引き継ぐ内部振替であり、全体原価を二重計上しない。

問題 0072　（難易度 3）

第1工程から第2工程へ900個・675,000円を振り替えた。第2工程加工費252,000円。第2工程で800個完成、月末仕掛品100個・加工進捗度40%。月初仕掛品なし。第2工程完成品原価と月末仕掛品原価の組合せはどれか。
ア：完成品927,000円、月末仕掛品0円（月末仕掛品へ原価配分していない）
イ：完成品840,000円、月末仕掛品105,000円（月末加工費を100%としている）
ウ：完成品600,000円、月末仕掛品327,000円（第2工程加工費の配分が）
エ：完成品840,000円、月末仕掛品87,000円（完成品800×1,050＝840,000円）

答え・解説　　正答：エ

ア：月末仕掛品へ原価配分していない。
イ：月末加工費を100%としている。
ウ：第2工程加工費の配分が不適切。
エ：前工程費単価750円、加工費単価300円。完成品800×1,050＝840,000円、月末75,000＋12,000＝87,000円。
総合解説：工程別総合原価計算では、前工程費と当該工程費を原価要素別に把握し、各工程の完成品と月末仕掛品へ整合的に配分する。

問題 0073　（難易度 1）

同じ製造工程からA製品・B製品など種類の異なる製品を継続的に生産し、種類ごとの原価を把握したい。この場合の生産形態の説明として最も適切なものはどれか。
ア：同一工程で種類の異なる複数の製品を連続生産し、製品種類（組）ごとに原価を把握する形態
イ：まったく同一の一種類製品だけを生産する形態
ウ：同種製品の品質・大きさの違いだけを等価係数で配分する形態
エ：個別注文ごとに製造指図書を発行する受注生産だけ

答え・解説　　正答：ア

ア：組別総合原価計算では種類の異なる製品群ごとに原価を計算する。
イ：単純総合原価計算が基本。
ウ：等級別総合原価計算に近い。
エ：個別原価計算。
総合解説：組別総合原価計算では、同一工程で生産される異種製品を組別に区分し、組直接費と組間接費を通じて各組の原価を計算する。

問題 0074　（難易度 1）

組別総合原価計算における原価の区分として、最も適切な説明はどれか。
ア：すべての原価を必ず均等に各組へ配賦する。
イ：特定の製品組に直接跡づけられる原価は組直接費、複数組に共通する原価は合理的な基準で各組へ配賦する組間接費となる。
ウ：組直接費は製造原価に含めない。
エ：組間接費は必ず営業外費用とする。

答え・解説　　正答：イ

ア：直接把握できる原価は直接賦課する。
イ：製品組との直接関連性により区分する。
ウ：各組の製造原価へ含める。
エ：製造原価として各組へ配賦する。
総合解説：組別総合原価計算では、組直接費を各組へ直接集計し、組間接費を合理的な配賦基準で各組へ配賦する。

問題 0075　（難易度 1）

組間接費300,000円を機械作業時間でA組・B組へ配賦する。A組の機械時間600時間、B組400時間である。A組への配賦額はいくらか。
ア：120,000円（B組への配賦額）
イ：150,000円（単純に折半している）
ウ：180,000円（300,000×600/(600＋400)＝180,000円）
エ：300,000円（全額をA組へ配賦している）

答え・解説　　正答：ウ

ア：B組への配賦額。
イ：単純に折半している。
ウ：300,000×600/(600＋400)＝180,000円。
エ：全額をA組へ配賦している。
総合解説：組間接費は製品組ごとの受益・発生原因を反映する合理的な配賦基準で配賦する。

問題 0076　（難易度 2）

A組の組直接費が240,000円、配賦された組間接費が180,000円である。A組の総製造原価はいくらか。
ア：240,000円（組間接費を含めない計算）
イ：180,000円（配賦組間接費だけを用いる計算）
ウ：60,000円（両者を差し引いている）
エ：420,000円（240,000＋180,000＝420,000円）

答え・解説　　正答：エ

ア：組間接費を含めていない。
イ：配賦組間接費だけ。
ウ：両者を差し引いている。
エ：240,000＋180,000＝420,000円。
総合解説：各組の総製造原価は、その組へ直接集計された原価と配賦された共通原価を合計して求める。

問題 0077　（難易度 2）

A組の完成品原価420,000円、完成数量600個である。A組の1個当たり製造原価はいくらか。
ア：700円（420,000÷600＝700円）
イ：420円（420,000円を1,000個で割ったような別処理）
ウ：600円（完成数量を単価としている）
エ：1,300円（数量と単価の関係を別の基準で行う計算）

答え・解説　　正答：ア

ア：420,000÷600＝700円。
イ：420,000円を1,000個で割ったような誤り。
ウ：完成数量を単価としている。
エ：数量と単価の関係を誤っている。
総合解説：組別総合原価計算では各組の完成品原価をその組の完成数量で除し、組別単位原価を求める。

問題 0078　（難易度 2）

A組直接費240,000円、B組直接費200,000円、組間接費300,000円をA:B＝3:2で配賦する。A組・B組の総製造原価の組合せはどれか。
ア：A組360,000円、B組380,000円（配賦比率を反対にする計算）
イ：A組420,000円、B組320,000円（A＝240,000＋180,000、B＝200,000＋120,000）
ウ：A組240,000円、B組200,000円（組間接費を配賦していない）
エ：A組540,000円、B組500,000円（組間接費を両組へ全額加算している）

答え・解説　　正答：イ

ア：配賦比率を逆にしている。
イ：組間接費はA180,000円、B120,000円。A＝240,000＋180,000、B＝200,000＋120,000。
ウ：組間接費を配賦していない。
エ：組間接費を両組へ全額加算している。
総合解説：組別原価は、各組固有の原価に組間接費の配賦額を加えて求め、配賦額合計が組間接費総額に一致することを確認する。

問題 0079　（難易度 2）

A組完成品原価420,000円・600個、B組完成品原価320,000円・400個である。A組とB組の単位原価として正しいものはどれか。
ア：A組800円、B組700円（両組を反対にする計算）
イ：A組・B組とも740円（総原価を総数量で単純平均して組別差を消している）
ウ：A組700円、B組800円（A＝420,000÷600＝700円、B＝320,000÷400＝800円）
エ：A組420,000円、B組320,000円（総原価であり単位原価として扱う考え方）

答え・解説　　正答：ウ

ア：両組を逆にしている。
イ：総原価を総数量で単純平均して組別差を消している。
ウ：A＝420,000÷600＝700円、B＝320,000÷400＝800円。
エ：総原価であり単位原価ではない。
総合解説：異種製品を組別に原価計算するため、各組の原価構成や配賦額が異なれば単位原価も異なる。

問題 0080　（難易度 2）

組別総合原価計算と単純総合原価計算の違いとして、最も適切なものはどれか。
ア：組別総合だけが総合原価計算であり、単純総合は個別原価計算である。
イ：単純総合では完成品原価を計算しない。
ウ：組別総合では共通費を一切配賦しない。
エ：組別総合では異種製品を製品組ごとに区分して原価計算するのに対し、単純総合では同種製品を一括して原価計算する。

答え・解説　　正答：エ

ア：どちらも総合原価計算。
イ：完成品原価を計算する。
ウ：組間接費は合理的に配賦する。
エ：生産される製品種類の違いが適用方法を分ける。
総合解説：同一工程で異種製品を生産する場合は組別、同種製品だけを反復生産する場合は単純総合という適用区分を押さえる。

問題 0081　（難易度 3）

A組について、材料費単価500円、加工費単価200円、月末仕掛品100個・加工進捗度50%、材料は始点投入である。A組の月末仕掛品原価はいくらか。
ア：60,000円（材料100×500＝50,000円、加工100×50%×200＝10,000円）
イ：70,000円（加工費を100%としている）
ウ：50,000円（加工費を含めない計算）
エ：35,000円（材料費まで50%としている）

答え・解説　　正答：ア

ア：材料100×500＝50,000円、加工100×50%×200＝10,000円、合計60,000円。
イ：加工費を100%としている。
ウ：加工費を含めていない。
エ：材料費まで50%としている。
総合解説：組別総合原価計算でも、各組の月末仕掛品について原価要素別の完成品換算量を用いて評価することができる。

問題 0082　（難易度 3）

A組直接費300,000円、B組直接費250,000円、組間接費250,000円を機械時間A600・B400で配賦する。完成数量はA500個、B500個で月末仕掛品はない。A・Bの1個当たり原価の組合せはどれか。
ア：A組700円、B組900円（両組を反対にする計算）
イ：A組900円、B組700円（A総原価450,000÷500＝900円、B350,000÷500＝700円）
ウ：A組800円、B組800円（総原価800,000円を総数量で一律配分している）
エ：A組500円、B組500円（組間接費や直接費を正しく反映していない）

答え・解説　　正答：イ

ア：両組を逆にしている。
イ：間接費A150,000/B100,000。A総原価450,000÷500＝900円、B350,000÷500＝700円。
ウ：総原価800,000円を総数量で一律配分している。
エ：組間接費や直接費を正しく反映していない。
総合解説：組別総合原価計算では、組直接費を把握し、組間接費を合理的に配賦し、その後各組の完成品数量等に基づいて単位原価を求める。

問題 0083　（難易度 1）

同一系統の製品が同じ工程から生産されるが、品質・サイズなどの違いにより複数の等級品に分かれる。このような生産に対応する説明として最も適切なものはどれか。
ア：まったく異なる製品を顧客別に受注生産する形態
イ：異種製品ごとに直接費を完全に分離できる組別生産だけ
ウ：同一種類の製品を同一工程で生産するが、品質・大きさ・重量などにより複数の等級品が生じる形態
エ：製造工程が存在しない商業活動だけ

答え・解説　　正答：ウ

ア：個別原価計算が適する。
イ：組別総合原価計算の説明。
ウ：等級別総合原価計算では類似製品を等級別に原価配分する。
エ：製造原価計算ではない。
総合解説：等級別総合原価計算では、同種製品の等級差を等価係数等により調整して原価を各等級へ配分する。

問題 0084　（難易度 1）

等級別総合原価計算で用いる等価係数の説明として、最も適切なものはどれか。
ア：各等級品の販売数量そのもの
イ：各等級品の売上高を必ずそのまま表す係数
ウ：仕掛品の加工進捗度だけを表す係数
エ：各等級品が基準等級品に比べてどの程度の原価を負担すべきかを表す相対的な係数

答え・解説　　正答：エ

ア：数量とは別の相対係数。
イ：原価負担関係を表すため販売高そのものとは限らない。
ウ：完成品換算量の進捗度とは別概念。
エ：等価係数で各等級品を基準品換算する。
総合解説：等価係数を各等級品の数量へ乗じて積数を求め、共通する総合原価を各等級へ合理的に配分する。

問題 0085　（難易度 2）

A等級1,000個・等価係数1.0、B等級600個・等価係数1.5である。B等級の積数はいくらか。
ア：900（600×1.5＝900）
イ：600（等価係数を乗じていない）
ウ：1,500（数量と係数を別の方法で加算・乗算している）
エ：1.5（等価係数をそのまま用いる考え方）

答え・解説　　正答：ア

ア：600×1.5＝900。
イ：等価係数を乗じていない。
ウ：数量と係数を誤って加算・乗算している。
エ：等価係数そのもの。
総合解説：等級別総合原価計算の積数は、各等級品の完成数量に等価係数を乗じて求める。

問題 0086　（難易度 2）

A等級は1,000個で等価係数1.0、B等級は600個で等価係数1.5である。完成品総合原価を按分する際の分母となる全等級の積数合計を求めなさい。
ア：1,600（単純な製品数量合計で、等価係数を反映しない計算）
イ：1,900（A積数1,000、B積数900、合計1,900）
ウ：2,500（計算が別処理）
エ：900（B等級の積数だけを用いる計算）

答え・解説　　正答：イ

ア：単純な製品数量合計で、等価係数を反映していない。
イ：A積数1,000、B積数900、合計1,900。
ウ：計算が誤り。
エ：B等級の積数だけ。
総合解説：総合原価を等級別に配分するため、各等級の積数を合計して総積数を求める。

問題 0087　（難易度 2）

等級品全体の完成品総合原価が950,000円、総積数が1,900である。積数1単位当たり原価はいくらか。
ア：950円（総原価を1,000等で除した別処理）
イ：1,900円（総積数をそのまま用いる考え方）
ウ：500円（950,000÷1,900＝500円）
エ：450円（計算が別処理）

答え・解説　　正答：ウ

ア：総原価を1,000等で除した誤り。
イ：総積数そのもの。
ウ：950,000÷1,900＝500円。
エ：計算が誤り。
総合解説：総合原価を総積数で除して基準となる積数1単位当たり原価を求める。

問題 0088　（難易度 2）

完成品総合原価950,000円、A等級の積数1,000、B等級の積数900、総積数1,900である。B等級へ配分される原価はいくらか。
ア：500,000円（A等級への配分額）
イ：950,000円（全原価をB等級へ配分している）
ウ：900円（B等級の積数を金額としている）
エ：450,000円（950,000×900/1,900＝450,000円）

答え・解説　　正答：エ

ア：A等級への配分額。
イ：全原価をB等級へ配分している。
ウ：B等級の積数を金額としている。
エ：950,000×900/1,900＝450,000円。
総合解説：各等級品の原価は、総合原価を各等級の積数比で配分して求める。

問題 0089　（難易度 3）

A等級へ500,000円を配分し完成数量1,000個、B等級へ450,000円を配分し完成数量600個である。各等級の1個当たり原価はどれか。
ア：A等級500円、B等級750円（A＝500,000÷1,000＝500円、B＝450,000÷600＝750円）
イ：A等級750円、B等級500円（両等級を反対にする計算）
ウ：A・Bとも593.75円（総原価を総数量で単純平均して等級差を消している）
エ：A等級1,000円、B等級1,500円（等価係数を単位原価へ別適用している）

答え・解説　　正答：ア

ア：A＝500,000÷1,000＝500円、B＝450,000÷600＝750円。
イ：両等級を逆にしている。
ウ：総原価を総数量で単純平均して等級差を消している。
エ：等価係数を単位原価へ誤適用している。
総合解説：等価係数が大きい等級ほど、同一数量当たりに配分される原価が大きくなる。

問題 0090　（難易度 3）

完成品総合原価720,000円。A等級800個・等価係数1.0、B等級400個・等価係数2.0である。A・Bへ配分される総原価と1個当たり原価の組合せとして正しいものはどれか。
ア：A総原価480,000円・単位600円、B総原価240,000円・単位600円（製品数量比だけで配分している）
イ：A総原価360,000円・単位450円、B総原価360,000円・単位900円（積数A800、B800、総積数1,600）
ウ：A総原価360,000円・単位900円、B総原価360,000円・単位450円（単位原価を反対にする計算）
エ：A総原価720,000円、B総原価720,000円（総原価を二重配分している）

答え・解説　　正答：イ

ア：製品数量比だけで配分している。
イ：積数A800、B800、総積数1,600。原価は各360,000円。単価A450円、B900円。
ウ：単位原価を逆にしている。
エ：総原価を二重配分している。
総合解説：等級別総合原価計算では、完成数量×等価係数で積数を求め、積数比で総合原価を配分し、各等級の完成数量で単位原価を計算する。

問題 0091　（難易度 1）

総合原価計算における正常仕損について、最も適切な説明はどれか。
ア：火災や重大事故など異常な原因だけで発生する仕損をいう。
イ：仕損品に評価額がある場合だけ正常仕損と呼ぶ。
ウ：通常の生産条件のもとで不可避的に発生すると認められる仕損で、その原価は原則として良品が負担する。
エ：完成品として合格した製品をいう。

答え・解説　　正答：ウ

ア：これは異常仕損の説明。
イ：評価額の有無で正常・異常を区分しない。
ウ：正常仕損は正常な操業の過程で避けがたい仕損であり、良品原価へ負担させる。
エ：仕損品は良品基準を満たさない。
総合解説：正常仕損は通常の製造過程で不可避的に生じる仕損で、2級では主に度外視法による処理を扱う。

問題 0092　（難易度 1）

正常減損について、最も適切な説明はどれか。
ア：品質不良により完成品が不合格となることだけをいう。
イ：販売後に返品された製品をいう。
ウ：材料価格が値下がりすることをいう。
エ：蒸発・乾燥・切削などにより、通常の製造条件のもとで不可避的に数量が減少することをいう。

答え・解説　　正答：エ

ア：それは仕損の説明に近い。
イ：製造工程の減損ではない。
ウ：数量減少ではなく価格変動。
エ：正常減損は正常な工程で不可避的に生じる数量減少。
総合解説：仕損は不合格品の発生、減損は数量の消失・減少という違いがあるが、正常なものは良品原価へ負担させる考え方をとる。

問題 0093　（難易度 1）

次のうち、正常仕損として扱うのが最も適切なものはどれか。
ア：通常の製造条件でも一定割合で避けがたく発生する規格外品
イ：設備の重大な操作ミスにより突発的に大量発生した不良品
ウ：火災で焼失した完成品
エ：盗難により消失した材料

答え・解説　　正答：ア

ア：通常の生産過程で不可避的な範囲の仕損は正常仕損。
イ：異常な原因によるため異常仕損。
ウ：異常な事故による損失。
エ：正常な製造過程に起因しない。
総合解説：正常か異常かは、通常の生産条件のもとで不可避的に発生するかどうかで判断する。

問題 0094　（難易度 1）

工程に1,000kgを投入し、正常減損率が投入量の4%である。月末仕掛品はなく、他に異常減損もない。完成良品数量はいくらか。
ア：1,040kg（減損分を加算する計算）
イ：960kg（正常減損量は1,000×4%＝40kg、良品は960kg）
ウ：40kg（正常減損量をそのまま用いる考え方）
エ：996kg（4%を4kgとしている）

答え・解説　　正答：イ

ア：減損分を加算している。
イ：正常減損量は1,000×4%＝40kg、良品は960kg。
ウ：正常減損量そのもの。
エ：4%を4kgとしている。
総合解説：正常減損率が投入量基準なら、投入量×正常減損率で正常減損量を求め、投入量から控除して良品数量を求める。

問題 0095　（難易度 2）

正常仕損品に売却価値がある場合の原価計算上の考え方として、最も適切なものはどれか。
ア：仕損品評価額を良品原価へ加算する。
イ：仕損品評価額は必ず資本金へ振り替える。
ウ：仕損品評価額を正常仕損による負担額から控除し、良品が負担する原価を減少させる。
エ：評価額がある場合は正常仕損として扱えない。

答え・解説　　正答：ウ

ア：評価額は回収価値なので原価を減額する方向。
イ：資本取引ではない。
ウ：仕損品に価値があれば、その回収価値分だけ良品負担原価を軽減する。
エ：正常仕損でも評価額を持つことはある。
総合解説：正常仕損品の評価額は、仕損により良品へ転嫁される原価を減らす回収価値として扱う。

問題 0096　（難易度 2）

正常仕損が工程の終点で発生し、月末仕掛品は仕損発生点に到達していない。この場合の正常仕損費の負担として最も適切なものはどれか。
ア：完成品と月末仕掛品が必ず同額ずつ負担する。
イ：月末仕掛品だけが負担する。
ウ：正常仕損費は誰も負担せず全額営業外費用とする。
エ：正常仕損発生点を通過した完成品だけが負担する。

答え・解説　　正答：エ

ア：仕損発生点への到達状況を考慮する。
イ：仕損発生点未到達なので負担しない。
ウ：正常仕損は原則として良品原価へ負担させる。
エ：月末仕掛品は仕損発生点に達していないため、正常仕損費を負担しない。
総合解説：正常仕損費の負担先は仕損発生点との関係で決まり、発生点を通過した良品が負担する。

問題 0097　（難易度 2）

正常仕損が工程の40%地点で発生し、月末仕掛品の加工進捗度が70%である。この場合の仕損費負担について最も適切なものはどれか。
ア：完成品だけでなく、仕損発生点を通過した月末仕掛品も正常仕損費を負担する。
イ：完成品だけが必ず負担し、月末仕掛品は進捗度に関係なく負担しない。
ウ：月末仕掛品だけが負担する。
エ：仕損発生点は負担関係に影響しない。

答え・解説　　正答：ア

ア：月末仕掛品は40%地点を通過しているため、正常仕損費負担の対象となる。
イ：仕損発生点を通過している場合は月末仕掛品も負担する。
ウ：完成品も発生点を通過している。
エ：発生点と月末仕掛品の進捗度が重要。
総合解説：正常仕損・減損の原価負担を考える際は、月末仕掛品が仕損・減損発生点を通過しているかを確認する。

問題 0098　（難易度 2）

月初仕掛品・月末仕掛品なし。材料・加工費の合計製造原価480,000円、投入量1,000kg、正常減損40kgで、減損品に評価額はない。完成良品1kg当たり原価はいくらか。
ア：480円（投入量1,000kgで割り、正常減損を無視している）
イ：500円（480,000÷960＝500円）
ウ：12,000円（480,000÷40kgの値で、減損量を分母にしている）
エ：520円（別の計算前提を用いた値）

答え・解説　　正答：イ

ア：投入量1,000kgで割り、正常減損を無視している。
イ：良品数量960kg。480,000÷960＝500円。正常減損原価は良品へ負担される。
ウ：480,000÷40kgの値で、減損量を分母にしている。
エ：計算が誤っている。
総合解説：正常減損を度外視して良品に負担させる場合、減損数量を原価配分の良品数量から除外するため、良品単位原価は上昇する。

問題 0099　（難易度 2）

月初・月末仕掛品なし。総製造原価600,000円、完成良品900個、正常仕損100個、仕損品評価額20,000円である。完成良品1個当たり原価はいくらか。
ア：666.67円（仕損品評価額20,000円を控除しない計算）
イ：580円（良品負担原価580,000円を1,000個で割っている）
ウ：644.44円（良品負担原価は600,000－20,000＝580,000円）
エ：600円（総原価を投入数量1,000個で割っている）

答え・解説　　正答：ウ

ア：仕損品評価額20,000円を控除していない。
イ：良品負担原価580,000円を1,000個で割っている。
ウ：良品負担原価は600,000－20,000＝580,000円。580,000÷900＝644.44円。
エ：総原価を投入数量1,000個で割っている。
総合解説：正常仕損品に評価額がある場合は、その価値を原価総額から控除して残額を良品へ負担させる。

問題 0100　（難易度 2）

正常仕損費と正常減損費の原価負担に共通する考え方として、最も適切なものはどれか。
ア：常に営業外損失として製品原価から除外する。
イ：常に資産として翌期へ繰り越す。
ウ：必ず売上高から直接控除する。
エ：正常な製造活動に伴う不可避的な損失として、原則として当該工程を通過した良品の原価に負担させる。

答え・解説　　正答：エ

ア：それは異常損失等の考え方と混同している。
イ：損失自体を資産計上するわけではない。
ウ：製造原価計算で処理する。
エ：正常な損失は良品原価の一部として処理する。
総合解説：正常仕損・正常減損は、通常の生産に必要な原価の一部として良品が負担する。

問題 0101　（難易度 3）

正常仕損は加工進捗度60%地点で発生する。月末仕掛品200個の進捗度は50%である。他の条件は同じとする。正常仕損費の負担について最も適切なものはどれか。
ア：月末仕掛品は60%地点に達していないため正常仕損費を負担せず、完成品側が負担する。
イ：月末仕掛品も完成品も必ず同率で負担する。
ウ：月末仕掛品だけが負担する。
エ：正常仕損費はすべて異常損失へ振り替える。

答え・解説　　正答：ア

ア：月末仕掛品50%は仕損発生点60%未到達。
イ：発生点への到達有無を考慮する。
ウ：発生点未到達なので負担しない。
エ：正常仕損である。
総合解説：仕損発生点と月末仕掛品進捗度を比較し、仕損点を通過している良品だけに正常仕損費を負担させる。

問題 0102　（難易度 3）

液体製品を1,200kg投入し、工程中に正常減損60kgが発生した。月末仕掛品はなく、減損物の評価額は12,000円、総製造原価は582,000円である。完成良品1kg当たり原価はいくらか。
ア：485円（評価額控除前原価を投入量で割る等の別処理）
イ：500円（良品数量1,140kg、負担原価582,000－12,000＝570,000円）
ウ：510.53円（評価額を控除せず582,000÷1,140としている）
エ：475円（570,000円を投入量1,200kgで割っている）

答え・解説　　正答：イ

ア：評価額控除前原価を投入量で割る等の誤り。
イ：良品数量1,140kg、負担原価582,000－12,000＝570,000円。570,000÷1,140＝500円。
ウ：評価額を控除せず582,000÷1,140としている。
エ：570,000円を投入量1,200kgで割っている。
総合解説：正常減損の総合問題では、良品数量の算定、減損物評価額の控除、残額の良品への負担を順に処理する。

問題 0103　（難易度 1）

正常仕損・正常減損の度外視法について、最も適切な説明はどれか。
ア：正常仕損品に完成品と同じ原価を必ず配分する。
イ：正常仕損費をすべて営業外費用へ振り替える。
ウ：正常仕損・正常減損に独立した原価を配分せず、その数量を原価配分上の良品数量から除外することで原価を良品に負担させる。
エ：月末仕掛品を必ず0円にする方法である。

答え・解説　　正答：ウ

ア：それは度外視法ではない。
イ：正常損失は良品が負担。
ウ：度外視法では正常損失原価を独立計算せず良品側へ含める。
エ：月末仕掛品原価も計算する。
総合解説：2級では正常仕損費・正常減損費の処理として度外視法を扱い、正常損失原価を良品へ吸収させる。

問題 0104　（難易度 1）

月初・月末仕掛品なし。投入1,000個、正常仕損100個が工程終点で発生し、完成良品900個となった。総製造原価450,000円、仕損品評価額はない。度外視法による完成品1個当たり原価はいくらか。
ア：450円（投入数量1,000個で割っている）
イ：5,000円（仕損数量100個で割っている）
ウ：405円（別の計算前提を用いた値）
エ：500円（正常仕損100個を独立評価せず、450,000円を完成良品900個で負担する）

答え・解説　　正答：エ

ア：投入数量1,000個で割っている。
イ：仕損数量100個で割っている。
ウ：計算が誤っている。
エ：正常仕損100個を独立評価せず、450,000円を完成良品900個で負担する。
総合解説：工程終点の正常仕損で月末仕掛品がない場合、総原価を良品数量で除して単位原価を求める。

問題 0105　（難易度 1）

正常仕損が工程終点で発生し、月末仕掛品の加工進捗度が50%である。度外視法における正常仕損費の負担先として最も適切なものはどれか。
ア：工程終点まで到達した完成品が負担し、月末仕掛品は正常仕損費を負担しない。
イ：月末仕掛品だけが負担する。
ウ：完成品と月末仕掛品が必ず数量比で負担する。
エ：正常仕損費を必ず営業外損失とする。

答え・解説　　正答：ア

ア：月末仕掛品は仕損発生点未到達。
イ：終点まで達していない。
ウ：仕損発生点を考慮する。
エ：正常仕損なので良品原価へ負担。
総合解説：度外視法でも、正常仕損費の負担関係は仕損発生点と月末仕掛品進捗度の関係で判断する。

問題 0106　（難易度 2）

正常減損が工程始点で発生し、その後に残ったものだけが加工される。月末仕掛品も減損発生点を通過している。この場合の度外視法の考え方として最も適切なものはどれか。
ア：完成品だけが必ず負担する。
イ：完成品と月末仕掛品はいずれも減損発生点を通過しているため、正常減損原価を負担する。
ウ：月末仕掛品だけが負担する。
エ：誰も負担しない。

答え・解説　　正答：イ

ア：月末仕掛品も発生点通過済み。
イ：始点減損なら残存する良品・仕掛品とも損失点通過済み。
ウ：完成品も通過している。
エ：正常減損は良品原価へ負担。
総合解説：正常損失発生点より後に存在する良品・仕掛品が、正常損失原価を負担する。

問題 0107　（難易度 2）

月初・月末仕掛品なし。総製造原価520,000円、完成良品800個、正常仕損200個、仕損品評価額40,000円である。度外視法による完成品原価総額はいくらか。
ア：520,000円（仕損品評価額を控除しない計算）
イ：560,000円（評価額を加算する計算）
ウ：480,000円（総原価520,000円から仕損品評価額40,000円を控除し）
エ：40,000円（仕損品評価額をそのまま用いる考え方）

答え・解説　　正答：ウ

ア：仕損品評価額を控除していない。
イ：評価額を加算している。
ウ：総原価520,000円から仕損品評価額40,000円を控除し、残額480,000円を良品が負担する。
エ：仕損品評価額そのもの。
総合解説：度外視法でも仕損品に価値がある場合は、その評価額を良品負担原価から控除する。

問題 0108　（難易度 2）

総製造原価480,000円、正常減損後の完成良品800個、月末仕掛品なし、減損物評価額なし。度外視法による完成品単位原価と完成品原価の組合せはどれか。
ア：480円／個、384,000円（投入量1,000個等で割った別処理）
イ：600円／個、600円（単位原価を総原価としている）
ウ：800円／個、640,000円（別の計算前提を用いた値）
エ：600円／個、480,000円（480,000÷800＝600円、完成品総原価は480,000円）

答え・解説　　正答：エ

ア：投入量1,000個等で割った誤り。
イ：単位原価を総原価としている。
ウ：計算が誤っている。
エ：480,000÷800＝600円、完成品総原価は480,000円。
総合解説：正常損失数量を除外した良品数量に原価を負担させるため、単位原価は残存良品数量を基礎に計算する。

問題 0109　（難易度 2）

正常仕損発生点が加工進捗度70%である。月末仕掛品Aは60%、月末仕掛品Bは80%まで加工済みとする。仕損費負担の考え方として最も適切なものはどれか。
ア：Aは仕損点未到達なので負担せず、Bは仕損点を通過しているので負担対象となる。
イ：Aだけが負担しBは負担しない。
ウ：A・Bとも進捗度に関係なく負担しない。
エ：A・Bとも必ず同額負担する。

答え・解説　　正答：ア

ア：仕損発生点通過の有無で負担関係を判断する。
イ：進捗度の判定が逆。
ウ：Bは仕損点通過済み。
エ：到達状況が異なる。
総合解説：正常仕損費の負担判断では、単純な月末数量だけでなく仕損点と進捗度の位置関係を見る。

問題 0110　（難易度 2）

総製造原価700,000円、仕損品評価額20,000円。度外視法により完成品原価600,000円、月末仕掛品原価80,000円と計算された。この結果について最も適切な説明はどれか。
ア：完成品原価600,000円だけが700,000円と一致すべきである。
イ：600,000＋80,000＝680,000円であり、700,000－20,000＝680,000円と一致するため整合している。
ウ：仕損品評価額20,000円を加えて720,000円と一致させる必要がある。
エ：度外視法では原価総額の一致確認は不要である。

答え・解説　　正答：イ

ア：月末仕掛品にも原価が残る。
イ：評価額控除後の配分対象原価と完成品・仕掛品原価の合計が一致。
ウ：評価額は原価から控除する。
エ：原価配分の整合確認は重要。
総合解説：度外視法でも、評価額控除後の配分対象原価が完成品原価と月末仕掛品原価の合計に一致することを確認する。

問題 0111　（難易度 3）

月初・月末仕掛品なし。投入1,000個のうち正常仕損100個が工程終点で発生し、完成良品は900個であった。材料費360,000円、加工費270,000円、仕損品評価額なし。度外視法による完成良品1個当たり製造原価はいくらか。
ア：630円（総原価630,000円を投入量1,000個で割っており）
イ：660円（正常仕損後の良品数量または原価総額の計算を別の基準で行う計算）
ウ：700円（総製造原価は360,000＋270,000＝630,000円）
エ：600円（加工費または材料費の一部を除外した計算となっている）

答え・解説　　正答：ウ

ア：総原価630,000円を投入量1,000個で割っており、正常仕損を良品へ負担させていない。
イ：正常仕損後の良品数量または原価総額の計算を誤っている。
ウ：総製造原価は360,000＋270,000＝630,000円。正常仕損100個を除く完成良品900個で負担するため630,000÷900＝700円。
エ：加工費または材料費の一部を除外した計算となっている。
総合解説：工程終点の正常仕損を度外視法で処理し、月末仕掛品がない場合は、正常仕損原価を完成良品だけが負担するため、総製造原価を完成良品数量で除して単位原価を求める。

問題 0112　（難易度 3）

2026年度の日商簿記2級における正常仕損費・正常減損費の処理として、出題範囲に含まれるものはどれか。
ア：非度外視法だけ
イ：仕損・減損は2級の出題範囲外
ウ：純粋先入先出法による仕損処理だけ
エ：度外視法

答え・解説　　正答：エ

ア：非度外視法は上位級側の論点。
イ：総合原価計算の範囲に含まれる。
ウ：純粋先入先出法は上位級側。
エ：公式出題区分表では2級の正常仕損・正常減損の処理として度外視法が対象。
総合解説：今回の問題では2級範囲に合わせ、正常仕損・正常減損の処理は度外視法を中心に扱う。

問題 0113　（難易度 1）

総合原価計算で追加材料を工程途中に投入する場合、月末仕掛品原価を計算するうえで最も重要な確認事項はどれか。
ア：月末仕掛品が追加材料の投入点まで到達しているかどうか。
イ：完成品の販売価格だけ。
ウ：株主数だけ。
エ：現金残高だけ。

答え・解説　　正答：ア

ア：投入点到達の有無で月末仕掛品が追加材料費を負担するかが決まる。
イ：追加材料費負担とは無関係。
ウ：製造原価計算と無関係。
エ：追加材料の投入状況を判断できない。
総合解説：追加材料費は、その材料が投入される工程地点を通過した仕掛品・完成品が負担する。

問題 0114　（難易度 1）

追加材料を加工進捗度50%地点で一括投入する。月末仕掛品200個の加工進捗度は40%である。追加材料費の負担として最も適切なものはどれか。
ア：月末仕掛品は全額の追加材料費を負担する。
イ：月末仕掛品は投入点に達していないため、追加材料費を負担しない。
ウ：月末仕掛品は追加材料費の40%だけを負担する。
エ：追加材料費は必ず営業外費用となる。

答え・解説　　正答：イ

ア：まだ投入点に達していない。
イ：40%は投入点50%未満。
ウ：一括投入なので進捗度に比例しない。
エ：製造原価。
総合解説：工程途中で一括投入される追加材料は、その投入点未到達の月末仕掛品には配賦しない。

問題 0115　（難易度 2）

追加材料を加工進捗度60%地点で一括投入する。月末仕掛品150個の加工進捗度は80%である。追加材料費の完成品換算量について最も適切なものはどれか。
ア：150個×80%＝120個だけを換算量とする。
イ：150個×20%＝30個とする。
ウ：月末仕掛品150個は追加材料を全量投入済みなので、追加材料費について150個分の換算量を持つ。
エ：月末仕掛品には追加材料費を一切配分しない。

答え・解説　　正答：ウ

ア：一括投入材料は投入点通過後100%負担。
イ：未完成率は使わない。
ウ：投入点60%を通過済み。
エ：投入点通過済み。
総合解説：一括投入の追加材料は、投入点を通過した時点で100%投入済みとして扱う。

問題 0116　（難易度 2）

追加材料を工程50%地点で一括投入する。完成品800個、月末仕掛品200個・加工進捗度70%で、追加材料費総額100,000円である。月初仕掛品はなく、全品が追加材料投入点を通過している。追加材料費の完成品換算量1個当たり原価はいくらか。
ア：125円（完成品800個だけで割っている）
イ：142.86円（月末仕掛品を70%換算している）
ウ：500円（別の計算前提を用いた値）
エ：100円（完成品800個＋月末仕掛品200個＝1,000個）

答え・解説　　正答：エ

ア：完成品800個だけで割っている。
イ：月末仕掛品を70%換算している。
ウ：計算が誤っている。
エ：完成品800個＋月末仕掛品200個＝1,000個。100,000÷1,000＝100円。
総合解説：工程途中で一括投入した追加材料でも、投入点を通過した月末仕掛品は追加材料費について100%換算する。

問題 0117　（難易度 2）

追加材料を工程80%地点で一括投入する。完成品900個、月末仕掛品100個・加工進捗度60%、追加材料費180,000円、月初仕掛品なし。追加材料費の1個当たり原価はいくらか。
ア：200円（180,000÷完成品900個＝200円）
イ：180円（投入総数1,000個で割っている）
ウ：187.50円（月末仕掛品を60%換算している）
エ：1,800円（数量を別の基準で行う計算）

答え・解説　　正答：ア

ア：月末仕掛品は投入点未到達なので追加材料換算量0。180,000÷完成品900個＝200円。
イ：投入総数1,000個で割っている。
ウ：月末仕掛品を60%換算している。
エ：数量を誤っている。
総合解説：追加材料の投入点に達していない月末仕掛品は追加材料費を負担しないため、完成品だけで追加材料費を負担する。

問題 0118　（難易度 2）

第2材料を工程始点で一括投入する。月末仕掛品が加工進捗度20%である場合、第2材料費の負担として最も適切なものはどれか。
ア：加工進捗度20%だけ負担する。
イ：月末仕掛品は第2材料を全量投入済みとして100%負担する。
ウ：完成するまで第2材料費を負担しない。
エ：第2材料費は期間原価として処理する。

答え・解説　　正答：イ

ア：一括始点投入ではない。
イ：始点投入なので加工進捗度にかかわらず全量投入済み。
ウ：すでに投入済み。
エ：製造原価。
総合解説：始点投入材料は加工進捗度とは独立して、工程に入った時点で100%投入済みとする。

問題 0119　（難易度 3）

工程途中で追加材料を投入した結果、製品の物量そのものが増加する場合の総合原価計算について、最も適切な説明はどれか。
ア：数量増加は無視し、常に投入前数量だけで原価計算する。
イ：追加材料費は製造原価に含めない。
ウ：追加材料投入による数量増加を把握し、投入点以後の完成品・仕掛品数量関係を調整して原価計算する必要がある。
エ：数量増加分は必ず売上高とする。

答え・解説　　正答：ウ

ア：物量整合が崩れる。
イ：製造に使用する材料費である。
ウ：数量増加を伴う追加材料は物量の流れにも影響する。
エ：製造途中で収益にはならない。
総合解説：追加材料が数量を増加させる場合は、原価だけでなく物量の流れも修正して完成品・仕掛品の計算へ反映する。

問題 0120　（難易度 3）

平均法。完成品800個、月末仕掛品200個・加工進捗度50%。第1材料は始点投入で総額400,000円、第2材料は工程40%地点で一括投入し総額100,000円、加工費270,000円である。月初仕掛品なし。月末仕掛品は第2材料投入点を通過している。月末仕掛品原価はいくらか。
ア：140,000円（加工費または追加材料費を過大に配分している）
イ：110,000円（第2材料費20,000円を月末仕掛品へ配分していない）
ウ：160,000円（加工費を100%完成として過大計上している）
エ：130,000円（月末＝200×400＋200×100＋200×50%×300＝130,000円）

答え・解説　　正答：エ

ア：加工費または追加材料費を過大に配分している。
イ：第2材料費20,000円を月末仕掛品へ配分していない。
ウ：加工費を100%完成として過大計上している。
エ：第1材料単価400円、第2材料単価100円、加工単価300円。月末＝200×400＋200×100＋200×50%×300＝130,000円。
総合解説：月末仕掛品は第2材料投入点40%を通過しているため第2材料費を100%負担し、加工費は進捗度50%だけ負担する。

問題 0121　（難易度 1）

標準原価計算を採用する主な目的として、最も適切なものはどれか。
ア：標準原価と実際原価との差異を把握・分析して原価管理に役立てるとともに、記帳の簡略化・迅速化にも役立てる。
イ：実際原価を一切把握しなくてよくすることだけが目的である。
ウ：販売価格を必ず標準原価と同額にするためである。
エ：原価差異を発生させないための制度である。

答え・解説　　正答：ア

ア：原価計算基準では原価管理を最重要目的とし、棚卸資産評価、予算作成、記帳の簡略化・迅速化も挙げる。
イ：実際原価との差異把握が必要。
ウ：販売価格決定だけが目的ではない。
エ：差異を把握・分析することが重要。
総合解説：標準原価計算は、あらかじめ設定した標準と実際を比較して差異を管理し、原価管理や迅速な記帳に活用する制度である。

問題 0122　（難易度 1）

製品1個当たりの標準直接材料費の算定として、最も適切なものはどれか。
ア：実際消費量 × 実際価格だけ
イ：標準消費量 × 標準価格
ウ：標準作業時間 × 標準賃率
エ：固定費予算 ÷ 正常操業度だけ

答え・解説　　正答：イ

ア：これは実際材料費。
イ：標準直接材料費は製品単位当たりの標準消費量と標準価格の積で算定する。
ウ：標準直接労務費の算定。
エ：製造間接費固定費率の算定。
総合解説：標準原価は物量標準と価格標準の両面から設定し、材料費では標準消費量×標準価格を用いる。

問題 0123　（難易度 1）

製品1個当たりの標準直接労務費は、通常どのように算定するか。
ア：実際作業時間 × 実際賃率だけ
イ：標準消費量 × 標準価格
ウ：標準作業時間 × 標準賃率
エ：完成品数量 × 販売単価

答え・解説　　正答：ウ

ア：これは実際直接労務費。
イ：材料費の算定。
ウ：標準直接労務費は標準時間と標準賃率の積。
エ：売上高の計算。
総合解説：標準直接労務費は、作業研究等に基づく標準作業時間と標準賃率を設定して算定する。

問題 0124　（難易度 1）

標準直接材料費を設定する際の標準消費量について、最も適切な説明はどれか。
ア：正常な仕損・減損は一切含めず、理論上ゼロに設定しなければならない。
イ：異常事故による損失を無制限に含める。
ウ：標準消費量は販売数量だけから決める。
エ：通常生ずると認められる程度の正常な減損・仕損等の消費余裕を含めて設定する。

答え・解説　　正答：エ

ア：正常な消費余裕を含める。
イ：異常損失を標準へ含める趣旨ではない。
ウ：製造条件を科学的・統計的に調査して設定する。
エ：原価計算基準は標準消費量に通常の減損・仕損等の消費余裕を含むとしている。
総合解説：標準は現実的な正常能率を前提とし、不可避的に生じる正常な減損・仕損を適切な範囲で織り込む。

問題 0125　（難易度 2）

パーシャル・プランの記帳について、最も適切な説明はどれか。
ア：仕掛品勘定の借方は実際原価で記入し、完成品への振替など貸方は標準原価で記入するため、原価差異が仕掛品勘定に現れる。
イ：仕掛品勘定の借方・貸方をともに標準原価で記入する。
ウ：仕掛品勘定の借方・貸方をともに実際原価で記入する。
エ：原価差異は一切把握しない。

答え・解説　　正答：ア

ア：パーシャル・プランでは投入を実際、産出を標準で記帳する。
イ：これはシングル・プラン。
ウ：標準原価計算の記帳方法ではない。
エ：差異把握が標準原価計算の重要目的。
総合解説：パーシャル・プランでは仕掛品への投入を実際原価、仕掛品からの払出し等を標準原価で記録し、仕掛品勘定に差異が集約される。

問題 0126　（難易度 2）

仕掛品勘定を投入時から払出時まで一貫して標準原価で記録し、原価要素ごとの実際額との差を投入段階で分離する記帳方法はどのような特徴を持つか。
ア：仕掛品借方を実際原価、貸方を標準原価で記入する。
イ：仕掛品勘定の借方・貸方をともに標準原価で記入し、実際原価との差異を材料・労務費・製造間接費などの段階で分離する。
ウ：仕掛品を一切使用しない。
エ：実際原価と標準原価の差を分析しない。

答え・解説　　正答：イ

ア：パーシャル・プラン。
イ：シングル・プランでは仕掛品を一貫して標準原価で記帳する。
ウ：製造途中原価を仕掛品として把握する。
エ：差異分析を行う。
総合解説：シングル・プランは仕掛品を標準原価で統一して記帳し、差異を原価要素の発生段階で把握する。

問題 0127　（難易度 2）

パーシャル・プランとシングル・プランの違いとして、最も適切なものはどれか。
ア：パーシャルでは標準原価を一切使わず、シングルだけが標準原価を使う。
イ：シングルでは原価差異が生じない。
ウ：主な違いは仕掛品勘定の借方を実際原価で記入するか標準原価で記入するかであり、完成品等への振替は標準原価で行う。
エ：両者は完全に同じ記帳方法である。

答え・解説　　正答：ウ

ア：パーシャルも貸方等で標準原価を使う。
イ：実際と標準が異なれば差異は生じる。
ウ：借方記入が両プランの主要な相違点。
エ：仕掛品借方の記帳が異なる。
総合解説：2級ではパーシャル・プランとシングル・プランの勘定記入の違いを押さえ、差異がどこで現れるかを理解する。

問題 0128　（難易度 2）

パーシャル・プランを採用している。当月、直接材料費の実際発生額が210,000円で、当月生産に対する標準直接材料費は200,000円であった。材料消費を仕掛品へ振り替える基本的な記帳額として適切なのはどれか。
ア：仕掛品借方200,000円（シングル・プランの考え方として扱う考え方）
イ：仕掛品貸方210,000円（材料投入は仕掛品の借方）
ウ：仕掛品には何も記入しない。（製造投入原価を仕掛品へ集計する）
エ：仕掛品借方210,000円（パーシャル・プランでは仕掛品への投入を実際原価で記入する）

答え・解説　　正答：エ

ア：これはシングル・プランの考え方。
イ：材料投入は仕掛品の借方。
ウ：製造投入原価を仕掛品へ集計する。
エ：パーシャル・プランでは仕掛品への投入を実際原価で記入する。
総合解説：パーシャル・プランでは直接材料費・直接労務費・製造間接費などの投入原価を実際原価で仕掛品借方へ記入する。

問題 0129　（難易度 2）

シングル・プランを採用している。当月の直接材料費実際発生額210,000円、当月生産に対する標準直接材料費200,000円である。仕掛品勘定の借方へ記入する直接材料費はいくらか。
ア：200,000円（シングル・プランでは仕掛品借方を標準原価で記入する）
イ：210,000円（実際原価で仕掛品借方を記入するのはパーシャル・プラン）
ウ：10,000円（標準と実際の差額として扱う考え方）
エ：0円（標準原価を仕掛品へ記入する）

答え・解説　　正答：ア

ア：シングル・プランでは仕掛品借方を標準原価で記入する。
イ：実際原価で仕掛品借方を記入するのはパーシャル・プラン。
ウ：これは標準と実際の差額。
エ：標準原価を仕掛品へ記入する。
総合解説：シングル・プランでは仕掛品勘定を標準原価で記帳し、実際との差異は別途差異勘定等で把握する。

問題 0130　（難易度 2）

製品1個当たり標準原価が、直接材料費500円、直接労務費300円、製造間接費200円である。当月完成品600個の標準完成品原価はいくらか。
ア：500,000円（直接材料費だけを基礎にしている）
イ：600,000円（1個当たり標準原価1,000円×600個＝600,000円）
ウ：1,000円（1個当たり標準原価で、完成数量を乗じていない）
エ：360,000円（直接労務費等の集計が別処理）

答え・解説　　正答：イ

ア：直接材料費だけを基礎にしている。
イ：1個当たり標準原価1,000円×600個＝600,000円。
ウ：1個当たり標準原価で、完成数量を乗じていない。
エ：直接労務費等の集計が誤り。
総合解説：標準製品原価は標準直接材料費・標準直接労務費・標準製造間接費等を集計して求め、完成数量を乗じて完成品標準原価を算定する。

問題 0131　（難易度 3）

パーシャル・プランで、月初・月末仕掛品はない。当月仕掛品へ実際原価620,000円を投入し、完成品を標準原価600,000円で振り替えた。仕掛品勘定に残る原価差異はいくらか。
ア：20,000円の有利差異（実際原価が標準より高い）
イ：600,000円の不利差異（標準完成品原価をそのまま用いる考え方）
ウ：20,000円の不利差異（実際原価620,000円が標準原価600,000円を20,000円上回るため不利差異）
エ：差異0円（20,000円の差がある）

答え・解説　　正答：ウ

ア：実際原価が標準より高い。
イ：標準完成品原価そのもの。
ウ：実際原価620,000円が標準原価600,000円を20,000円上回るため不利差異。
エ：20,000円の差がある。
総合解説：パーシャル・プランでは実際投入額と標準払出額との差が仕掛品勘定に現れ、差異勘定へ振り替えられる。

問題 0132　（難易度 3）

実際直接材料費210,000円、標準直接材料費200,000円で10,000円の不利差異が生じている。両プランにおける差異把握の説明として最も適切なものはどれか。
ア：パーシャルでもシングルでも仕掛品には必ず210,000円を記入する。
イ：シングルでは差異10,000円を無視する。
ウ：パーシャルでは仕掛品に200,000円だけを記入する。
エ：パーシャルでは実際額を仕掛品へ投入して後に仕掛品勘定で差異が現れ、シングルでは標準額を仕掛品へ投入して差異を材料費段階で分離する。

答え・解説　　正答：エ

ア：シングルは標準200,000円。
イ：差異は別途把握する。
ウ：パーシャルは実際210,000円を投入する。
エ：両プランの差異認識位置の違い。
総合解説：標準原価計算の記帳では、差異総額だけでなく、どの勘定段階で差異を認識するかがパーシャル・プランとシングル・プランの重要な違いである。

問題 0133　（難易度 1）

直接材料費の価格差異の算定として、最も適切なものはどれか。
ア：（標準価格－実際価格）×実際消費数量
イ：（標準数量－実際数量）×標準価格
ウ：（標準賃率－実際賃率）×実際時間
エ：（標準時間－実際時間）×標準賃率

答え・解説　　正答：ア

ア：価格差異は価格差に実際数量を乗じる。
イ：これは数量差異。
ウ：賃率差異。
エ：作業時間差異。
総合解説：材料費差異は価格差異と数量差異に分解し、価格差異には実際消費数量、数量差異には標準価格を用いる。

問題 0134　（難易度 1）

実際生産量に許容される材料数量より実際消費量が多いか少ないかを金額評価する「材料数量差異」。その計算式として正しいものを選びなさい。
ア：（標準価格－実際価格）×実際消費数量
イ：（標準消費数量－実際消費数量）×標準価格
ウ：実際数量×実際価格
エ：標準数量×標準価格

答え・解説　　正答：イ

ア：価格差異。
イ：数量差異は数量差を標準価格で評価する。
ウ：実際材料費。
エ：標準材料費。
総合解説：材料数量差異は、実際生産量に対して許容される標準消費数量と実際消費数量の差を標準価格で評価する。

問題 0135　（難易度 1）

標準価格500円/kg、実際価格520円/kg、実際消費量1,000kgである。材料価格差異はいくらか。
ア：20,000円の有利差異（実際価格が標準より高いので不利）
イ：500,000円の不利差異（標準材料費の一部で差異として扱う考え方）
ウ：20,000円の不利差異（(500－520)×1,000＝－20,000円）
エ：520,000円の有利差異（実際材料費をそのまま用いる考え方）

答え・解説　　正答：ウ

ア：実際価格が標準より高いので不利。
イ：標準材料費の一部で差異ではない。
ウ：(500－520)×1,000＝－20,000円。実際価格が高いため20,000円不利。
エ：実際材料費そのもの。
総合解説：材料価格差異は実際数量を用い、実際価格が標準価格を上回る場合は不利差異となる。

問題 0136　（難易度 2）

当月実際生産量に対する標準消費数量960kg、実際消費数量1,000kg、標準価格500円/kgである。材料数量差異はいくらか。
ア：20,000円の有利差異（実際数量が標準より多い）
イ：40,000円の不利差異（数量差40kgをそのまま1,000円等で評価している）
ウ：480,000円の不利差異（標準材料費をそのまま用いる考え方）
エ：20,000円の不利差異（(960－1,000)×500＝－20,000円）

答え・解説　　正答：エ

ア：実際数量が標準より多い。
イ：数量差40kgをそのまま1,000円等で評価している。
ウ：標準材料費そのもの。
エ：(960－1,000)×500＝－20,000円。実際消費量が標準を40kg超えるため不利。
総合解説：材料数量差異は標準数量と実際数量の差に標準価格を乗じ、過剰消費は不利差異となる。

問題 0137　（難易度 2）

標準価格500円/kg、標準消費量960kg、実際価格520円/kg、実際消費量1,000kgである。材料価格差異と数量差異、および材料費総差異の組合せはどれか。
ア：価格差異20,000円不利、数量差異20,000円不利、総差異40,000円不利
イ：価格差異20,000円有利、数量差異20,000円有利、総差異40,000円有利
ウ：価格差異40,000円不利、数量差異0円、総差異40,000円不利
エ：価格差異20,000円不利、数量差異20,000円有利、総差異0円

答え・解説　　正答：ア

ア：価格差異20,000円U、数量差異20,000円U、合計40,000円U。標準480,000円、実際520,000円との差にも一致。
イ：実際価格・数量とも標準を上回るため不利。
ウ：数量差異も発生している。
エ：数量差異の方向が誤り。
総合解説：材料費総差異は価格差異と数量差異の合計で、標準材料費と実際材料費の差額に一致する。

問題 0138　（難易度 2）

直接労務費の賃率差異の算定として、最も適切なものはどれか。
ア：（標準時間－実際時間）×標準賃率
イ：（標準賃率－実際賃率）×実際作業時間
ウ：（標準価格－実際価格）×実際材料数量
エ：実際作業時間×実際賃率

答え・解説　　正答：イ

ア：作業時間差異。
イ：賃率差異は賃率差に実際時間を乗じる。
ウ：材料価格差異。
エ：実際直接労務費。
総合解説：直接労務費差異は賃率差異と作業時間差異に分解し、賃率差異は実際作業時間を用いる。

問題 0139　（難易度 2）

直接労務費の作業時間差異の算定として、最も適切なものはどれか。
ア：（標準賃率－実際賃率）×実際作業時間
イ：標準時間×標準賃率
ウ：（標準作業時間－実際作業時間）×標準賃率
エ：実際時間×実際賃率

答え・解説　　正答：ウ

ア：賃率差異。
イ：標準労務費。
ウ：時間差異は作業時間差を標準賃率で評価する。
エ：実際労務費。
総合解説：作業時間差異は、実際生産量に対する標準作業時間と実際時間の差を標準賃率で評価する。

問題 0140　（難易度 2）

標準賃率2,000円/時間、実際賃率2,100円/時間、実際作業時間400時間である。賃率差異はいくらか。
ア：40,000円の有利差異（実際賃率が標準より高い）
イ：800,000円の不利差異（標準賃金額であり差異として扱う考え方）
ウ：840,000円の有利差異（実際賃金額をそのまま用いる考え方）
エ：40,000円の不利差異（(2,000－2,100)×400＝－40,000円）

答え・解説　　正答：エ

ア：実際賃率が標準より高い。
イ：標準賃金額であり差異ではない。
ウ：実際賃金額そのもの。
エ：(2,000－2,100)×400＝－40,000円。実際賃率が高いため不利。
総合解説：賃率差異では実際時間を用い、実際賃率が標準を上回る場合は不利差異となる。

問題 0141　（難易度 3）

当月実際生産量に対する標準作業時間380時間、実際作業時間400時間、標準賃率2,000円/時間である。作業時間差異はいくらか。
ア：40,000円の不利差異（(380－400)×2,000＝－40,000円）
イ：40,000円の有利差異（実際時間超過は不利）
ウ：20,000円の不利差異（時間差20時間に1,000円しか乗じていない）
エ：760,000円の不利差異（標準労務費をそのまま用いる考え方）

答え・解説　　正答：ア

ア：(380－400)×2,000＝－40,000円。実際時間が20時間超過している。
イ：実際時間超過は不利。
ウ：時間差20時間に1,000円しか乗じていない。
エ：標準労務費そのもの。
総合解説：作業時間差異は標準時間より実際時間が多ければ不利、少なければ有利となる。

問題 0142　（難易度 3）

標準賃率2,000円/時間、標準作業時間380時間、実際賃率2,100円/時間、実際作業時間400時間である。賃率差異、作業時間差異、労務費総差異の組合せはどれか。
ア：賃率40,000円有利、時間40,000円有利、総差異80,000円有利
イ：賃率40,000円不利、時間40,000円不利、総差異80,000円不利
ウ：賃率80,000円不利、時間0円、総差異80,000円不利
エ：賃率40,000円不利、時間40,000円有利、総差異0円

答え・解説　　正答：イ

ア：実際賃率・時間とも標準を上回る。
イ：標準労務費760,000円、実際840,000円で80,000円不利。内訳は各40,000円不利。
ウ：賃率と時間の両差異がある。
エ：時間差異の方向が誤り。
総合解説：直接労務費総差異は賃率差異と作業時間差異の合計となり、標準労務費と実際労務費との差に一致する。

問題 0143　（難易度 1）

標準原価計算における製造間接費差異の分析として、最も適切なものはどれか。
ア：材料価格差異と材料数量差異だけに分析する。
イ：賃率差異と作業時間差異だけに分析する。
ウ：実際発生額と標準配賦額との差異を、予算差異・能率差異・操業度差異などに分析する。
エ：製造間接費差異は分析せず必ず0円とする。

答え・解説　　正答：ウ

ア：材料費差異の分析。
イ：直接労務費差異の分析。
ウ：原価計算基準は製造間接費差異を能率差異、操業度差異等に分析する。
エ：差異を算定・分析する。
総合解説：製造間接費差異は、実際支出、能率、操業度など原因別に分解して管理する。

問題 0144　（難易度 1）

正常操業度1,000時間、固定製造間接費予算300,000円、変動費率200円/時間である。標準製造間接費配賦率はいくらか。
ア：300円/時間（固定費率だけを用いる計算）
イ：200円/時間（変動費率だけを用いる計算）
ウ：800円/時間（固定費率と変動費率の加算を別の基準で行う計算）
エ：500円/時間（固定費率300,000÷1,000＝300円、変動費率200円、合計500円）

答え・解説　　正答：エ

ア：固定費率だけ。
イ：変動費率だけ。
ウ：固定費率と変動費率の加算を誤っている。
エ：固定費率300,000÷1,000＝300円、変動費率200円、合計500円。
総合解説：標準製造間接費配賦率は、正常操業度に基づく固定費率と変動費率の合計として求める。

問題 0145　（難易度 2）

固定費予算300,000円、変動費率200円/時間、実際作業時間850時間、実際製造間接費480,000円である。予算差異はいくらか。
ア：10,000円の不利差異（実際時間に対する許容予算＝300,000＋200×850＝470,000円）
イ：10,000円の有利差異（実際額が許容予算を上回る）
ウ：180,000円の不利差異（固定費予算との差を取っている）
エ：470,000円の不利差異（許容予算額をそのまま用いる考え方）

答え・解説　　正答：ア

ア：実際時間に対する許容予算＝300,000＋200×850＝470,000円。実際480,000円なので10,000円不利。
イ：実際額が許容予算を上回る。
ウ：固定費予算との差を取っている。
エ：許容予算額そのもの。
総合解説：予算差異は実際製造間接費と、実際操業度に対応した変動予算上の許容額との差で求める。

問題 0146　（難易度 2）

変動費率200円/時間、実際作業時間850時間、実際生産量に対する標準作業時間800時間である。能率差異はいくらか。
ア：10,000円の有利差異（実際時間が標準時間を上回る）
イ：10,000円の不利差異（(850－800)×200＝10,000円）
ウ：25,000円の不利差異（固定費率を含む総配賦率500円で計算している）
エ：50,000円の不利差異（時間差50時間をそのまま金額化している）

答え・解説　　正答：イ

ア：実際時間が標準時間を上回る。
イ：(850－800)×200＝10,000円。実際時間超過なので不利。
ウ：固定費率を含む総配賦率500円で計算している。
エ：時間差50時間をそのまま金額化している。
総合解説：3分法の能率差異は、実際時間と標準時間の差を変動費率で評価する。

問題 0147　（難易度 2）

正常操業度1,000時間、固定費予算300,000円、実際生産量に対する標準作業時間800時間である。操業度差異はいくらか。
ア：60,000円の有利差異（操業度不足なので不利）
イ：40,000円の不利差異（変動費率200円で計算している）
ウ：60,000円の不利差異（固定費率300円×(1,000－800)＝60,000円）
エ：100,000円の不利差異（時間差と配賦率の計算が別処理）

答え・解説　　正答：ウ

ア：操業度不足なので不利。
イ：変動費率200円で計算している。
ウ：固定費率300円×(1,000－800)＝60,000円。標準操業度が正常操業度を下回るため不利。
エ：時間差と配賦率の計算が誤り。
総合解説：操業度差異は、正常操業度に対する実際生産量の標準時間不足を固定費率で評価する。

問題 0148　（難易度 2）

予算差異10,000円不利、能率差異10,000円不利、操業度差異60,000円不利である。製造間接費総差異はいくらか。
ア：60,000円の不利差異（予算差異と能率差異を含めない計算）
イ：80,000円の有利差異（3差異とも不利）
ウ：差異0円（相殺要因がない）
エ：80,000円の不利差異（10,000＋10,000＋60,000＝80,000円不利）

答え・解説　　正答：エ

ア：予算差異と能率差異を含めていない。
イ：3差異とも不利。
ウ：相殺要因がない。
エ：10,000＋10,000＋60,000＝80,000円不利。
総合解説：予算差異・能率差異・操業度差異の合計が製造間接費の総差異となり、実際額と標準配賦額との差に一致する。

問題 0149　（難易度 3）

標準製造間接費配賦率500円/時間、実際生産量に対する標準作業時間800時間、実際製造間接費480,000円である。製造間接費総差異はいくらか。
ア：80,000円の不利差異（標準配賦額500×800＝400,000円）
イ：80,000円の有利差異（実際額が標準配賦額を上回る）
ウ：400,000円の不利差異（標準配賦額をそのまま用いる考え方）
エ：480,000円の有利差異（実際発生額をそのまま用いる考え方）

答え・解説　　正答：ア

ア：標準配賦額500×800＝400,000円。実際480,000円との差80,000円不利。
イ：実際額が標準配賦額を上回る。
ウ：標準配賦額そのもの。
エ：実際発生額そのもの。
総合解説：製造間接費差異の分析結果は、実際発生額と標準配賦額の差で総額を検算できる。

問題 0150　（難易度 3）

標準原価差異30,000円が不利差異であり、2級範囲の売上原価加減法で処理する。差異勘定を貸方に振り替えて閉鎖する場合の基本的な仕訳はどれか。
ア：（借）原価差異30,000 ／（貸）売上原価30,000
イ：（借）売上原価30,000 ／（貸）原価差異30,000
ウ：（借）製品30,000 ／（貸）原価差異30,000
エ：（借）資本金30,000 ／（貸）原価差異30,000

答え・解説　　正答：イ

ア：有利差異の処理方向。
イ：不利差異は売上原価を増加させる。
ウ：売上原価加減法では売上原価へ処理する。
エ：資本取引ではない。
総合解説：2級で扱う売上原価加減法では、不利な標準原価差異は売上原価へ加算し、有利差異は売上原価から減額する。